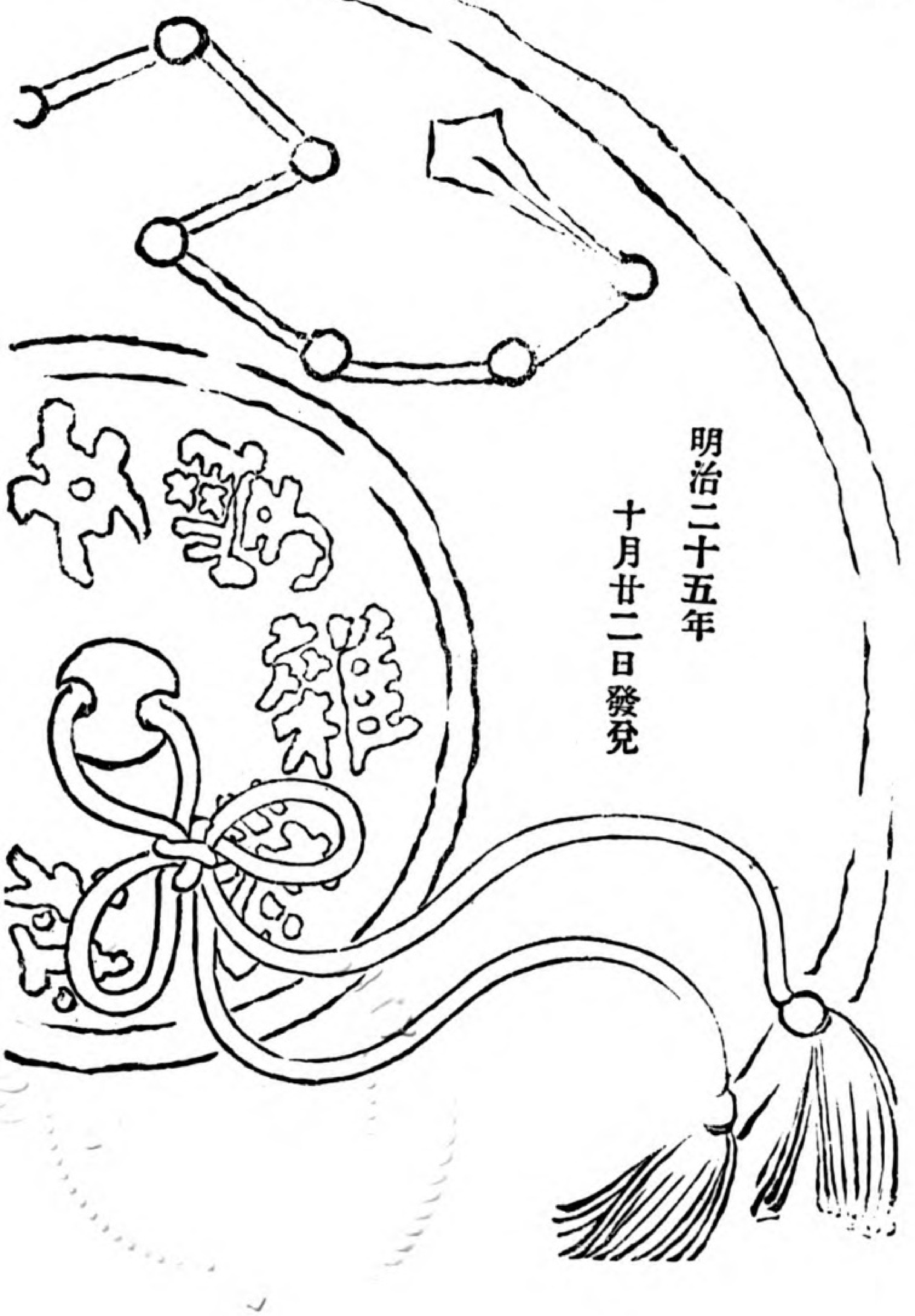
Oct. 1892
no 330-1

女學雜誌

第三百三拾號

甲の卷



明治二十五年十月廿二日發兌

注意

社説 **我國目前之經濟界** は現今日本の經濟界の紛亂離反せる慘狀を畫き出し之が救濟の爲の説法者が第二の誤謬を指摘し若し道に據りて之を正さずんば日本將來の大危機は必らず此に存すと痛論す。**論説** 欄内の一奇文雜感と題する者は匿名氏の寄送にして一篇七章文字數千言奇想落下して紙面に一種の妙音を奏す。**江戸城下の奇兒** は天知子が江戸ッ子の亡靈を弔して之が爲の評傳を作り感慨無限の同情を以て江戸ッ子の腸をさぐり胸を穿ち窮所を判し長所を賞め其產來の因緣を說き其消滅の跡方を悔みたるもの江戸城下の奇見涙を揮て知己に謝せん。**保羅之傳** の批評は其優所を歎賞すると共に容赦なく其短所を揭げ讀者益讀の爲に一箴を呈す。**文界要報** は目下文學界の現況を穿ち諸の作者の近狀を悉し最新の出物を短評す批評界の一大隱者の筆に成る。**秋窓雜記** 七篇は透谷子が書窓に於ける幽邃清高の感を記す或は蟋蟀の聲に天地の奧理を感じ或は俳匠の俗氣に感慨を窮む **小說** 欄内に一青年異樣の述懷と題する者は某女史が某少年に代りて其心裏胸底の異樣の秘感を白述するもの彼の漫に想像を畫くものと異なり虛中實あり實中幻想漠々として一種異樣の趣味を存す同好讀者の清評を待つものなり。**教育學講義** は例の如く四頁を附し胎教の部を畢りて母の感化の章に入れり。

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 330. OCTOBER 22nd. 1892.

EDITORIAL :—National Economy at the Present Day.

LEADING ARTICLES:—Thoughts on Marriage. a Certain Eccentric man in Edo. (Tenchishi.)

CRITIICAL NOTES :—Life of Saint Paul. The Omi Sage; Monthly Report of the Young Man's Associations.

MISCELLANEOUS :—Autumn Meditations. Homely Thoughts on Some Poems. Current Events in the Literary World. Pleasures of a Private Library.

NOVEL :—"Srange Adventures of a Young Man." (Tsuyuko.)

HERE AND THERE :—

SUPPLEMENT :—

本號（第三百三拾號）目次

○社說　我國目前の經濟界

○論說　婚事雜感婚姻自緣、縁は天に在り、長し短し、爾ち自身の如くなれ、中央集愛、品性風采容貌、余に情交の愉快あり、）江戸城下の奇兒（天知子）

○批評　保羅之傳 ○近江聖人 ○青年會月報

○雜錄　秋窓雜記（透谷子） ○獨嘯偶錄（詩歌愛吟）是空子 ○文界要報（脫蟬子） 書齋一興

○小說　一少年異樣の述懷（つゆ子）

○片々

○附錄　教育學講義

前週（第三百廿九號）赤表

○社說　ウエスト女史禁酒運動

○小說　夏草

○兒藍　吾宿の花（若松しづ子）

○雜錄　今昔ものがたり（忙中の一閑） ○過は人に嫁すべからず ○諫に從ふ流るゝが如し ○買物の種類

○史傳　臨終の母ウイラード

○批評　荻花集說 ○楠公の夫人

○摘要　犯罪上男子と婦人との比較

○時事　孤兒學院流行 ○孤女學院と監督ウイリアムス ○女學復興 ○伏姬○濠洲に於ける日本婦人

○女報

○問答　（山月子）

○孤兒之友　（蓄鋤子）

前々週（第三百廿九號）白表

●社說　王佐論○總理大臣

●論說　處女の純潔を論す（富山洞伏姬の一側の觀察）透谷子○本邦森林安固の度（齋藤乙作）

●批評　南白遺稿と江藤新平○大石良雄○史學普及雜誌

●雜錄　徒然艸に兼好法師を問く（天知子） ○近詠三首（米文痴） ○人間の一大忘却（ふみ子） ○社會の現狀。基督教徒の責任（山月子）

●片々　明治學院生○軍人救護會○青年學會○東北救世軍○同志社通信○宮城基督教青年會○英國の青年會

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第三百三十號　明治二十五年十月廿二日發兌

社說

我國目前の經濟界

孟子、梁の惠王に説きて、王何んぞ必らず利を言はんとす、只だ仁義あるのみと喝破せしより此の方。フヒシチクラート、不幸にして、義利圓滿の理を完説すると能はず、寧ろ反動を激揚して、純利競爭主義のマンチエスター一派を發揮せしめたる以來。久しひ哉、經濟と道德との相離るゝ何んぞ斯の如く甚しきや。

昔し孔門の弟子冉有は、其志を言て財を理むるにありとせり。而して、後世の儒者は、多くは經濟を知らず、貧しきに居ると、貧しきに安んずるとの別を知らず、好學篤道の人は則はち以て利を談ず可らずと誤解せり。此に於てか、君子大率ね貧しくして、其志を行ふ能はず、富人大率ね賤劣にして、道を訓ゆるに足らず。經濟と道德とは、遂に呉越に分れたり。

つら〳〵、現今目前の我國經濟界を察するに、遊手徒食する者はあり、委賴寄生する者はあり、不生產の事業に狂奔する者はあり、拜金宗を奉じて錢を守る者はあり、道德を空談して實利を辨ぜざる者はあり、來世を渴仰して厭世苦肉を最上とする者はあり。然れども、眞に好く經濟の正理を辨まへ、當然に錢の品位を知識し、大道に平らかに安んじて富の勢力を正しく善用するものに至りては、極めて稀なり殆んど稀なり。嗚呼、理財、汝ち何んぞ斯く久しく眞知己に遭遇せざる。

夫れ維新前后を、比較して、日本の富の度、增せしや、減ぜしや、何如に。若し、冷然として統計表の示す所ろにより、得々として單に輸出入多少の標準にのみ據るとせば、日本の經濟君に頌德表を上まつりて、其勳功を祝するは難きにあらじ。左れど、正眞の意義に於て富なるものゝ、增減如何にと案ずる時は、中夜長歎して、我日本國の富の爲めに慨泣せずんばあらず、嗟々もし此まゝにして進行せんか、日本將來の大恐慌の一つは、確かに、經濟上に關するものならん。

近頃ろ、商人立身談を語るものを聞けば、多くは所云る紳商

の事に係はる。紳商とは、正當の商道によらず、陥利の方便によりて一攫万金の僥倖を私しするものを多しとす。たとひ然らざるも、其實資を撿査し去らば、借財、所有に超え、實は無一物の極貧者たるもの、三五の遣り繰りに一時の榮華をかざり、以て一日一日の僥倖を待つものに過ぎず。

近頃ろ會社の事を説くものを聞けば、社長月給幾百圓、交際費何百圓、社員何十人、利益配當何割何分と云ふ、而して、空大の幕を破つて其内面實際の樂屋を仔細に點撿し來れば、何んぞ計らん、眞正に利益を配當し得可きものは極めて極めて稀なり、奇しむ可し、門戸廣大、樓厦巍々、着洋服の社員整々堂々たりと云へども、眞正の實益は、鎮鍮の火鉢、土藏の搆へ、番頭丁稚小僧の家風に於て收入する所ろに及ばざるや遠しと。

近頃ろ、田舎より上京する人に就いて聞くに、地方年來の豪家にして、産を破るもの益々多しと。則はち、其由縁を問へば、親は、政治競爭に狂ひ、子は、洋服、巻煙草、金ぐさり、金時計に奢り、山林を賣つて、株券を買ひ、更に株券を賣つて、虚名を買はんとす、此に於てか、祖先粒々辛苦の世襲財産は、一朝夕にして亡滅すと。

凡そ、此類悲慘の實話、耳を塞ぐも尚ほ續々として聞ゆるを苦しむ。試みに、見よ、國會議員の口にして高利貸に一言なきもの、馬車に乘りて尚ほ債鬼に追はるゝもの、政黨の運動費にして連判連借を要するものあるに非ずや。其他の事、推知す可し。

損耗するもの、借金するもの、破産するもの、一方に於て斯の如し、而して、益を興し廢物を利用す可きもの、他方に存するなきや、日本は既に利を擧げ盡し、最早や移住殖民の外に大策なきやと案ずれば、北は北海道に於て、南は小笠原島に於て、未だ開拓せず、未だ採取せざる天土天産引もきらず、千島には海獸万を以て數ふ可きに、現に益を收むるものは、大抵外國人なり、西南の地下大率ね石炭なるに、内國人未だ多く之を採堀するヿを得ず、山林は到る處ろに荒れて、山は大率ね遊び居れり、四面の海、千百の河は、魚を棲はしめずして、空しく流れ居れり。豈啻だ之のみならんや、人は徒らに、北海道を談ずるとき、東北の野は、何んぞ吾を後にするやと怨む。豈啻だ、東北の野のみならんや、東京を出る、

半日にして、上總下總の地すら尚ほ耕夫尠きことを歎ず。否な、上總下總のみにはあらず、主府を去る半里、滊車を走らする數分、試みに、品川、大森もしくば、王子、赤羽根の邊に至り見るに、現に尚ほ不用不毛の地たるもの少なからず。路上を見れば、血氣の壯年、飴を賣り、ラヲをすげかへ、人力車夫は大抵三分の二ほどぶら〳〵として遊び居り、壯士は鈴を振つて新聞紙を賣る。吾黨常に思へらく、日本は女子國なりと、何んとなれば、現に壯年男子の爲す所ろの仕事は大抵女性にて代つて辨ずることを得べければ也。

夫れ、一方に於て、遺利、遺力の空しく存すること如斯なるに際し、他方に於て、利と力とを徒らに費耗すること彼の如し。川河、海に流れて、源頭水を養はず、火山煙を吐ひて地下火を起さず、遠からずして、其の枯滅衰廢せんと、何事よりも明白にあらずや。

事情斯の如し、此故に慨然として、國に憂ひ、殖産興業の事に熱言するもの、尠からず。福澤翁、屢ば錢を說き、前田正名千里獨歩して茶業を談ず。吾黨は其立論の主旨に同意せざるも、其感情精神の有る所ろに贊成せざるを得ず。但だ、夫れ、空しく費やすもの、徒らに遊ぶもの、共に非なりと雖ども、之に說くに、正道を踏まざるの經濟を以てするは、亦同じく不可也。吾黨は、此故に、今の殖産興業論者に同意すること能はず、況んや貯畜勤勉論者をや、更に況んや拜金宗の信徒をや。

夫れ、産を興すは、自個の産を增さんが爲めに非ず、利を殖やすは、自個の利を加へんが爲めにあらず、勤めて益し、儉して富を益すは、斷じて自家幸樂の爲めにす可らざる也。苟くも然らず、金を拜するが故に錢を蓄はへ、自から樂しまんが爲めに勤儉するとせば、其富むは即はち利己心の富む也、利己心の富むは、國民を卑しくするもの也、國民を卑しくするは、實に之を貧しくする也。如此き經濟論を守錢奴的の經濟論と云ふ。此經濟論は人をして、黄金の下に服せしめ、万靈を驅つて物質の奴隷となさんとす。吾黨の斷じて採らざる所ろの者也。

抑そも、孔方先生は何ものぞ。羽なくして能く飛び、足なくして能く來ると雖ども、必竟是れ夫自己に於て價値少なきもの也。但だ夫の力量を代表し、權威を代表し、諸々の方便を

代表するが故に價値ある也。此故に、錢は、人の力量、權威、及び諸々の方便を現はす、錢を有するとは、即はち、此等三者を有すると同じ。

然るに、人、世に存するの目的は、自己の能力を發達開展し、兼て、人を愛し、人をして其天成の目的を達せしむるにあり。故に、もし、自個の力量、自己の權威、自己事を爲すの方便ありとせば、在ん限り之を用ひ盡して、人の善の爲に使はざる可らず。否らずして、之を私しするは、天與の賜物を貪私するに異ならず。人道に於て決して爲す可らざる所のもの也。されば、此等の能力を代表せる錢の使用法に至りては亦た自から明白にあらずや。

冷淡なる倫理論は言ふ、人は他人を害せざる限り何事を爲すも可也と。此に於てか、自から得たる富は、之を自己の欲するまゝに使用するを咎めず、たとへば、之を放埒に使用するも咎むるヿなし、況んやたゞ、之を貯蓄し之を愛惜するに於ては、遂に一言の戒を狹むヿ能はず。但だ之に敎へて曰はんとす、如此きは殖利の法にあらず、豈に損ならずやと、彼は純利を以て人を導びくも、道を以て之に敎ゆるヿを知らず。」

あゝ、眞誠の大道は、安んぞ此如き狹少なるものならんや。人もし他人を害せば罪あり、然れども、他人を益せざれば亦均しく道德上の罪人ならずや。自個、富を所有す、即はち、自己、力量、權威、及び諸々の方便を所有せり、而して、公益愛他の事に善用せざれば、是れ、天物を私し、生世の歸趣に背き、人道の進行を妨ぐる者也、何ぞ、之を咎めざるを得ん。此故に、富を積むの精神は、智德を積むの精神と同一ならざる可らず。他なし、之を公益に使用せんが爲め也。左れば、遺利を拾ふは、遺賢を招くが如く、荒地を開耕するは、人心を敎育開發するが如くならざる可らず。而して、富を使用するは、當に智德を使用するが如く謹愼なる可し、智德を自己の爲めに弄用せざるが如く、富を私益の爲に專用す可らず。賢者君子は、天に代りて其智德を用ふ、富者は、天に代りて其力を用ふ。共に之れ、上帝上天に代るの使者なり、當に嚴肅謹愼にして、其任命の重大なるヿを覺悟す可し。

此故に、經濟を說くものは、道德を離る可らず、もし道德の意義なくして、經濟を談ずるときは、人をして卑きに就しめ聖賢を驅つて、朝市の商人となすもの也。シーランドの博士

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

マルテンセン曰く、

世の富は、人の自由獨立なる生存及び發達を得せしむる基礎として用ゆる限り善きものとなる。故に、人は道德上の意義に於て其眞誠の所有物となすとを得るより多く所有す可らず、道德上の意思及び精神の爲めに使用するとを得るより(即はち之を道德用するとを得るより)多く所有す可らず。何人も、其富の上に心を傾むけ、之によりて束縛せらる可らず、世の富に委頼する人の心は、或は貪慾となり、或は放埓奢肆となり、之が爲めに惣てを忘れ、又之を唯一の樂となし、凡そ安んじて此世に生存せんには、是非とも此の富なるものなかる可らずと思ふに至る。

蓋し、智德を慕ひて智德を私用せず、富を尊重して而して富を私用せず、超然として其上に脫出し、以て之を人の益に善用するに至りて、初めて其眞義を得たりと云ふ可し。此故に、經濟は大道也、之を談ずるものは、公益の爲にせざる可らず貯蓄は善事也、之を勸むるものは、愛他の爲にせざる可からず。もし誤まつて此の一義を欠かば、興利殖益の說法は偶ま以て、人世を毒するに於て止まんとす。我國眞誠の經濟家二宮報德先生は曰く、

梅辻と云ふ神學者江戶に來りて講ずるに、專ぱら儉約を尊とんで謂れなく只儉約せよ〳〵と云ひて儉約して何にすると云ふ事なし、……此の如く一般儉約を爲たりとも何の面白き事もなく國家の爲にもならざる也。夫れ我が儉約を尊とぶは、用ひる處あるが爲なり、宮室を卑ふし衣服を惡くし、飲食を薄うして資本に用ひ、國家を富實せしめ、万姓を濟救せんが爲めなり、彼が目途なく、至る處なく、只だ儉約せよと云ふとは大に異なる。

人ありて、此說を聞き、一笑して之を迂なりとするものあらんか。如此き人は人情を知ると云ひて實は人の眞情を知らず、實際に精はしと稱えて、實は甚はだ活識に迂なるの人たらん。試みに、文化文政以來、我國に於て、眞に好く經濟を愼しみ、正しく利を興し產を擧げたるもの、何如なる人種に多きやを省りみなば、其人や多くは、報德派の人、もしくは之に暗合するの人たるとを知らんとす。現に、目今に於て其の實例を求めば、眼前其證蹟を擧るに乏しきとを覺えず。凡そ

利の爲に金を積むものは、其人他日、もしくは、其子他年に於て、亦た利の爲に之を失はんとす。特に聞け、靈々たる天地間受造物中の最高最貴なる人にして、善及び愛他の爲めに中心を刺激せらるゝヿなく、黄金の爲めに、自利の爲に、榮華の爲に、自家幸福の爲めに、刺激せらるとせば、たとひ、勤儉力行刻苦貯蓄すとも、其行や動物的のみ、何をもてか之により其人を美にするヿを得ん、而して人を美にせざるの經濟法は實は長久の損を招くの根源たる也。

嗚呼、我國經濟界目前の現況、斯の如く、見るが如く、窮迫せり。今や實に眞誠經濟道士なかる可らず。夫れ、今の道德界の腐敗を歎じては、眞誠君子の出んヿを求む。今の國步艱難の東洋問題界に際しては、眞誠智者の出んヿを望む。而して、此等眞誠の智德の發現を熱望すると共に、吾黨は亦眞誠實力の寶庫たる彼經濟家の出んヿを要むるや切なり。冀くは、額に汗し、手に豆し、足を泥にし、營々拮据して實業、勞勉刻骨せん、而して、正當の收益を以て、尤とも儉素に自己の生計を立て、其餘を擧て悉とく積善報德の資と爲さん、但だ宋襄の慈善は人を害す、無報の救濟は人を立しむるの道にあらず、故に尤とも愼しみて此の資を善用し、天才天德ありて其能力を欠くものに恩貸せん、而して恩貸の金は必らず返さしめ、更に報德の義捐を爲さしめ、以ていよ／＼積善報德の金を增さん、如此せば、久しからずして、我土に荒地なく、吾野に遺賢なけん。斯て報德先生の所云る、

我道は荒蕪を開くを以て勤とす、而て荒蕪に數種あり、田畑實に荒れたるの荒地あり、又借財嵩みて家祿を利足の爲に取られ祿ありて益なきに至るあり、是れ國に取て生地にして本人に取て荒地なり、又薄地麁田年貢高掛り丈けの取實のみにして作益なき田地あり、是上の爲に生地にして下の爲に荒地なり、又資產あり金力ありて國家の爲をなさず徒らに驕奢に耽り財產を費やすあり、家に取りて尤とも大ひなる荒蕪なり、又智あり才あり、學問もせず國家の爲も思はず琴棋書畫などを弄して生涯を送るあり、世の中の爲め尤とも惜む可き荒蕪なり、又身躰强壯にして業を勤めず怠惰博奕に日を送るあり、是又自他の爲に荒蕪なり、此數種の荒蕪の內、心田荒蕪の損國家の爲に大ひなり、次に田畠山林の荒蕪あり、皆勤て

起さずばある可らず、此數種の荒蕪を起して、悉とく國家の爲に供するを以て我道の勤とす。

なるものに至らば、其快果して何如ん。語を寄す、四方有爲の實業的少年諸君。諸君何んぞ不生產的狂奔に營々とし、我國膏肓の病を察せずして、徒らに蝶の如く翩翻たる。政治界に意あらば當に總理大臣を以て任ず可し、敎育界に意あらば、當に大儒を以て任ずべし、若し其才實業經濟に在りとせば、何んぞ、一と度び奮つて、明治時代第二の二宮先生たらざる。今や、先生の志を嗣ぐもの極めて稀にして、而して、其所云る空言的の門弟は、巨万の金を徒費して、先生の爲めに神社を設けんとはなす。あゝ、經濟正道の行はれざる、一に何ぞ斯の如く太甚しきや。

論説

婚事雜感

泣血生

泣血生とは、何人なるや、實名を知らず、只だ此文の神戶より郵送せられたるを知る也。此文、輕快にして、下に一種の悲調を潛ましむ、蓋し尋常人の筆にあらず。文中まゝ面白からぬ句あるによりて掲載せざらんとせり。而して遂に之を棄てしめざるは、文に妙魔の力ありと知らる。編者は吾が讀者に通讀の勞を要むるもの也。

女學雜誌編者白

仲秋、月深け、夜靜まりて、夜風、冷かに身にしむ心地しける折、破窓の下に認む。

（一）婚姻自箴

婚姻は人間一生の大事なり、輕々敷致すまじきぞ。鄭重の上に鄭重を加へ、念に念を入れて、最とも嚴そかに行はざるべからず。決して一時の逸やり氣に乘じて輕卒にも迂濶と致すまじきもの也。先づ一身の準備の、十分に出來あがりたる上にて、相談すべき親兄弟には相談し、語らふべき知己朋友には眞率に語らひ、承諾を得べき人々には承諾を得、さて后に之を執り行ふ事と致すべし。若し然らずして厚顏にも、又た大早計に結婚するが如きとあらば、啻だに後日に追びて臍を噬むも及ばざるの悔を招く而已ならず、世人の胡亂者とならむも、鏡にかけて見る如し。深く慮るべきにあらずや。夫れ前車の覆へるは後車の戒とかや。見よ我國にて從來、不注意、無分別の結婚を爲したる幾多紅顏の青年は今ま如何になり

つるぞ。其成れの果を見よ。不幸、憂鬱、失望、落膽、苟且、偸安は、實に、彼等の憫れむ可き運命にあらずや。殷鑒近く彼等に有り。爾ぢそれ發憤警省せよ。

他は暫らく措きて、熟ら余が一身を顧みるに、余は乳臭猶未だ除かざるの少年なり。茲年とつて〇〇歳。筋骨ひきしまらず。骨格逞ましからず。器能の發達亦た十分と云ひ難し。少年血性の意氣のみ、矢猛に逸やれども、元氣未だ内に旺然たらず。鬱勃たる満腔の思想未だ萬丈の氣焔を吐くに至らず。況んや學校を出でゝ于茲僅かに十數箇月。實際上學び得たりし所、幾何も無きに於てをや。嗚呼綿材末學、加ふるに未だ世故に慣れず、人情に通ぜざる白面書生、余の如き者、何を以てか婚を議するに足らんや。

故に余は、昨今の如く、頻りと、知己の慫慂あるに關はらず、尚は暫らく結婚する能はじ。又其媒妁紹介あるが故に餘義なく、結婚を承諾する能はじ。勿論何人を介して余の意中を叩くも、諾否は云はじ、決して云はじ。謹で余が知己に言ふ。諸君が造次にも、顛沛にも、余に結婚を勸め、更に自ら進むで媒妁紹介の勞をも辭し玉はざるは、是れ皆な眞實に不肖余の如きを念ふての厚意なるべしと、中心竊かに感謝の情に堪へずと雖も、熟々現今の身上を考ふる時に於ては、事情略ぼ此の如し。諸君請ふ少しく諒察する所あれ。余豈に漫りに木石を以て自ら許す者ならむや。

(二)縁は天にあり

嘗てより縁は天にありと聞く。基督教を信ずるに及びて益々神の合はせ玉ふものは人之を離すと能はざるを感ぜり。世に結ぶの神ありや無しや、余之を知らずと雖、古來縁は異なものと云ひ、あいゑん奇縁と云ひ、袖の振合も多少の縁と云ふ俚諺の如き、盖し結縁の神の、攝理に出づるを云へるものにあらずや。かの意太利の英雄カルバルヂーが、曾て一面識なき南米の勇婦アンタと伉儷を結びたるが如き、誰れか之を天縁に非ずとせんや。之を思ひこれを念へば、余は心强かるべき也。希望滿々たるべき也。譬ひ今日余が目前知り人のうちに、連理を語らひ比翼を契ぎるの佳人なしとて、ゆめ失望するに足らざる也。それ世界は廣し、佳人は溥なり。天が下、何處にか余を知り、余を愛し、余を慕ひ、余が爲には何か厭はん、虎伏す野邊、鯨よる浦は愚か、何處いかなる國の果、山の奥なりとも、あこがれ行くと云ふが如き献身者のなからんやは。もとより余は彼女を見ず、彼女を知らずと雖、攝理の神は早晩、彼女を余の配偶者として與へ給ふべし。男子此信仰あり、此希望ありて、始めて天縁を語る可し。試に問ふ。落花心ありて、流水に氣色を添ゆれば、流水又情あり、落花を浮めて春の餘波を惜むは果して何の時ぞ。

(三)長し短し

天下意の如くならざる者、只に双六の賽と、叡山の僧と、鴨川の水のみならんや、三度たく飯さへ、こわし、やわらかし。思ふ儘にならぬが浮世の中の習ひぞかし。若し人間萬事塞翁の馬たるを知らば世間思はしき配偶なき亦た怪むに足らず。武藏野に草は種々多けれど、摘栞にすれば扨も少なし。成る程世界は茫々ひろく、佳人は濟々多しと雖も、我が宿の妻に擇ばんとせば、さても少なきものかな。帶に短し、襷に長し。一德あれば一失を免かれず。宛かも。梅は匂深くして、枝たをやかならず、櫻は色美なれども、其香なく、柳の枝に風折は無けれど、匂もなく、花もなきが如し。嗟す。梅が香を櫻の花に匂はせて柳の枝に咲かせたらん如き、完全圓滿なる理想的佳人は、天使の世界ならば、いざ知らず、人間なかまにては、先づ無かるべしと諦めざる可からず。

(四)爾ぢ自身の如くあれ

嗚呼世は已でに澆季となりぬ。世事何ごとか義人憤慨の種とならざらむ。余ひそかに世間配偶を擇む者の爲す所を見るに、あな、うたてや、其多くは僞善なり。虚飾なり。諂諛なり。ゴマカシ也。口蜜腹劍なり。彼等は綿羊の姿にて來れども、内は暴き狼なり。然れども眞の男女は甚く之に反對す。すなはち彼は配偶を得んが爲めに强いて容子を飾ざり、體裁をつくろひ、能く見られんと思ひ、心にも無きとを、ある樣に云ひ做し、巧言令色を以て、人に迎合し、愛嬌を賣つて、人の歡心を買ひ、一種の曲學阿世の徒と成り了せずして、何時も有りの儘にてある也所謂彼自身の如くにてある也、故に彼は天眞なり、自由なり、大膽なり、率直なり、素朴なり、俗に云へば平氣の平左なり。その一絲半毫の虚飾なく、詐僞なく、體裁なく、メッキなく、有りのまゝなる資質性行に眼を着くる者を、眞との男女と云ひ、其眞との男女の互に言ひ出るとしもなく、落花流水の深き中らひとなるを天縁若くば佳偶とは云ふ也。然るを彼の傾城遊女の顰に倣らひてか、女性の謹みを打ち忘れて、男子にかき口説き、男子も亦た女性一片の愛を買はんが爲めに

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

甘んじて膝下の駒となり男子平生の氣象を枉げて、百方いひより、つゐに由なき義理にからまれて、男はつまらぬ女と添ひ、女も亦た狹き心より思はぬ男に相見ゆるが如きは果して何の心ぞや。

（五）中央集愛

婚姻は中央集愛なり。又た献身なり。男女互ひに愛を一身に集むれば也。情郎、愛を情婦に集むれば、孃、思ひを郎に專らにす。婚姻は實に人情の東京なるかな。

難ずる者あり、云はく、若しそれ我國の政治上に於ける中央集權の餘弊は、餘りに、重きを中央帝都に置きて、地方の衰微を顧みざるにありとすれば、云はゆる中央集愛の弊や、動もすれば、男子は妻を、女子は夫を愛するを知りて、父母兄弟を疎んじ、親戚知己を輕むずるが如き偏頗なしとも云ひ難し。引例にするは畏なれど、日本の或る曲本にも、許嫁の娘、恨を郎に寄する語のうち「都でお別れ申てより勿躰ない事ながらとゝ樣や母さまを思ふ案じは何所へやらあなたの事が苦に成てほんに寐た間もわすれ兼逢たい見たいとあけくれにこがれしたふて居る物を」云々とあり。然らば乃はち中央集愛は人情を破ぶるの賊には非ざるか。私慾偏頗を貪ぼるの惡覺には非ざる乎と。

嗚呼これ何等無知の暴言ぞ。論者の如きは只だ愛の皮相を見て未だ其眞相を看破らざるが故に、斯かる誤解も生ずるなれ。抑そも婚姻は人情を賊する者にあらずして、却つて濃厚ならしむる者也。偏愛私欲を貪らずして汎愛衆に及ぼすの雅量を養ふ者也。蓋し愛の本體は數量に非ずして德性なり。即ち數學的に多寡を論ずべき者にあらずして、品性上より高下を論ずべき也。たとへば愛の全量を十とし、其九を意中情人に傾瀉集合せば、殘數只だ一なり。故に情人以外の人に對しては一のみの愛にして薄情、疎略、殘忍に待遇すると云ふ者に非ずして、愛は人の至情天性に基づくと雖、之を修養發達せしめざれば、圓滿と爲り難きを以て、玆に人あり、全心滿腔の愛情を意中の愛人に注射する時は、其人の性情には、愛の本質が膨脹し、發達し、活動し、洋々堪へて、中に泉を涵成し、遂に混々あふれて他の人に及ぶ可き者なり。戀せずば人は情のなからまし物のあはれは是よりぞ知ると云ふ古歌は如何にも愛の本體を妙に詠じたるもの也。語を寄す。新郎新婦、爾ぢは是れ愛の習學者なり。專門科として愛を學ぶ者也。人生五十年、七十は古來稀なりと云ふと雖も、中生以上愛を學び、愛を味ひ、愛を解し、愛を高かめ、而して愛を行ふ。また人生の一大快樂ならずや。然れども爾ぢが愛の卒業生なりと思へる時は、乃はち破鏡覆水又如何んともし難き不幸なる運命を開らくの時と知らずや。

之は又た宗教の根本的原理なり。神を愛するの愛、滿幅の精神に溢れて、玆に始めて愛憐の心起ると何ぞ異ならむや。

（六）品性、風采、容貌

男子、妻を擇ぶに當り、何より先きに注意すべきは、婦人の性質なり。品格なり。云ふにや及ぶ。人間の價値は其生れとか、家柄とか、身分とか財産とか地位とか、學問とか、容貌とか云ふ者によりて、定まるものにあらずして、人間は人間として彼自身に價値ある者也。生れ、門閥、財産、學問抔は、云はゞ、人間の附屬物に過ぎざれば、其等に戀々せず、人の人たる性質、品格に注目掛念せざるべからず。財産や學問は後からにても出來申す可し。何程財産あり、學問あり、門閥ありと雖、若し當人にして、驕慢、薄情、輕卒、淫奔の浮かれ女なりせば如何にせん。塩既に其味を失へり。又用なし。

風采は婦人の資格に重むずべき者也。風采と云へば優美にして嫺なるを宜しとすれど、餘り禮式にかゝつらひ、ナヨ〳〵として、お姫樣の如きは醜くし。況してべそ〳〵として傾城遊女の如きは見るだに胸惡るし。それ風采は氣象の自から外に發はれたるもの也。故さら造るべきものにあらず。故に凛としたる氣象の婦人には、自から凛として秋水の犯すべからざる如き風采あり。沈着なる氣象の婦人には自然ドッシリとして大山前にくづるゝも色動かずと云ふが如き、從容迫らざるの風采あり。總別之をのぞむに、をさなしき婦の如きも、内に獅子奮迅の氣象横はりて、正可の時に懷劔を翳ざす的の武士風を帶びたる、愛と勇氣を一身に、兼れ備へし風采ならば、申分なし。

容貌の美醜は余の問ふ所に非ず、只だモーラル、ビュチー（德性の優美）の自から面ざしに發し、をもむき何處となく氣高く凛として口締まり、愛嬌の溢ぼるゝ計りなるを略ぼ理想的に近しとす。

要するに人の性質、品格、信仰、氣象は本にして、風采、容貌、學問、藝能は末なり、本を棄てゝ末にのみ走る人の、世に澤なるは、うたてきことなりかし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

（七）余に情交の愉快あり

概して男女の愛情の發達をたづぬるに略ぼ三段の時期を通過するものゝ如し。その第一を初戀の時代と云ふ。嵯峨の屋氏が「都の花」にて巧みに寫されたる如き無邪氣にして、あどけなき愛情なり。余は十才より十二三才の間に於て、今日より念へば、初戀でありし如き經驗なきに非ず。次を獸情の時代と云ふ。盛んに動物的情慾の勃興する時代にして、愛戀には何時も肉慾の伴生するを通例とす。少年血氣の徒の尤も誤り易すき誘惑の時代也。余は屢々の苦戰の後ち、幸ふにして此尤も危險なる時代に九死一生を得たりき。而して男女間の風俗、並に俗間に流布せる惡文學は、大に此時代に歡迎せられ跋扈跳梁して、荼毒を逞うすと知るべし、最後を情交の時代とす。西哲の語に愛を愛すと云ふ事あり。情交の時代は即ち愛を愛するの時代也。わけも無く、埒もなく、漠然として女人を戀ひ慕ふ稚な戀にあらず。さりとて異性の人をさへ見れば、犬か猫の如く立ちどころに、獸情を燃やし、肉慾を沸かし、胸の思ひに堪へがたき血氣の戀にもあらずして、内なる人より淡々湧き出づる愛の泉を掬して之を我が靈性に飲むの樂是也。氣高き品德より徐ろに送り來る愛の雰圍氣に包まれて呼吸するの樂是也。たとひ山川遠く隔りて會見の期、盡くと雖、言笑相忘れず、天涯の一角より他の一角に、一縷斷るに斷られぬ連鎖の繫がりて、靈と靈との互みに接吻するの樂み是也。嗚呼若し我に還の精神的の快樂あらむ乎。我は妻なくして既に妻ありと云ふ可き也。

江戸城下の奇兒

天知子。

窓には西嶺千秋の雪を含み門には東呉萬里の舟を繫ぐと万里和尙が未來の繁榮を豫言したる千代田の城は、太田道灌入道の莫妄像を容れ置きし勘忍嚢は、好し破れたるも依然として城廓堅く、嘗ては豐臣太閤の覇業眼をして多望の地よと指ざさしめたる江戸の地は、實に德川に由りて豫言を完うし、終に明治の至尊をして玉座を止め奉るに至ては、万里和尙も其意外なるに愕きやすらん。

幸福は此武藏源頭草深き所にや落ちけん、三百年餘の幸福は終に一種の變性兒を産むに至れり、土豪江戸太郎が鎌倉武士を凌ぎたる赫々名望の氣骨を埋めたる此江戸の地は終に一個の奇兒を擧げたり、其江戸太郎の氣骨と太田入道憤死の怨血とが肥やしたる此土地は德川の武斷制度に由りて終に多幸の寵兒江戸ッ子を産みたるなり。

秋風木の葉に哀れを吟ずる窓下に於て余は此寵兒を追懷して其末路を悲しむ、詩聖ウヲルズヲルス曾て戀人を歌ふたるの句中に、暗き樹下に獨坐せる可憐の女姿を見き其好ましげに掩ひ茂れる天蓋は床しき陰もて其光明を飾りぬ、我れは優しき狂想もて其形骸を見居りたる内に其判明なりし天姿は朦朧の内に包まれて黃金の髮も邁步すらも、終に空氣の中に溶け去りぬと、余は此寵兒を見る中殆んど或點に於て此觀あり、偶々思ふて此多福兒を觀察せんことを欲したりぬ。

德川武斷の暗黑なる樹下に茂れる民草は皆卑屈に風靡せられて肅殺滿目、殆んど人類を軟化して餘す所なからんとせり、此時に當り快然として一種の氣風を鍛治し、陰然守る所ありて裏面より其武力を壓縮しつゝ獨可憐に踞坐したる者なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しを知らん、而して武力を壓縮せらるゝにも係らず其繁茂せる武力者は之れを愛遇して常に其天蓋は其光明を修飾しつゝありしなり。何を以て之れを愛遇するか、何を以て武力を壓縮せられしか、之れ余が江戸ッ子に於て先づ其境遇を觀んと欲する所以なり。

江戸ッ子は家康入城以來三遠等各國の人種より成りたる自然淘汰の雜種族にして、其明治政府入城以來各國の人種が優勝劣敗の淘汰を以て終に滅びたるの人種なり、故に紡綞躰を以て起伏を爲し其末路は僅かに東京人種を產み殘して消散し終りたり。而して此人種は壓制武斷を直接に受けたる朝な夕なの慷慨より習慣せられ、骨堅く眼鋭く、人を見たら盜賊と思へ火を見たら火事と思へよと訓戒し、大江戸八百八町に殆んと其領分を擴げ、全く平民社會を其陣營として暴戾慓悍なる旗本八万騎と自餘の武士が「斬捨て御免」の愕くべき特權に對峙し、ビクともせずに歡樂を謠ひ居りしは抑々怪むに堪えたり。武力政府が唯一の利器なる武權は全く掌中にあらずと雖ども、彼れは金錢を以て德川武士に當る唯一の武器とし、町奴の俠客と消火夫の冒險者とを以て唯一の强兵とし、屢々示威運動を爲しては參勤交代の幾百大名をも屑とせず、一意裏面的の勢力を以て對抗し、氣を壯んにし膽を張るを勤めぬ、火事は江戸の花なり喧嘩は江戸の名物也と誇稱せし彼れが野蠻的の心情は如何、晝夜絕へざる驚愕に慣れたる所より火事塲は彼れが練膽の戰塲なり、喧嘩は彼れが養氣の演武手段なり、火事と喧嘩は殆んど江戸ッ子の元氣の如くにてありつるなり、斯くして彼れは德川三百年の太平中に於て戰國的思想を養成したるも亦奇ならずや。

彼れが養ひたる此戰國的の氣力は之れを用ゆるに所を求めずんば止まず、裏面にては武士社會に氣焔を吐くと雖ども又表面に漏す所を求めずんば非ず、之れ彼れが終に後世末派の氣風を誤りたる所なるべし、彼れが最も威力を誇示せし得意の塲所は東海道なりき、其反對なる氣風を憎む餘り或は上方贅六と罵り或は田舍者よと嘲る如きは、全く其口癖と成りて終に自己得意の傲慢を生じ、輕蔑の惡風を殘して他を知るとに鈍く、孫子が所謂敵を知らず己れをも知らざるものにして、世の進步に未だ惰眠を覺さず、學に遲れて悔ひず道を聽て之れを冷笑す、金錢を以て打勝ちし者又金錢を以て敗る、好し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

や商戰の燒點たりしと雖ども、終に其本色たりし「利に屈せず義に屈死せん」との理想を轉覆して全く利の爲めに俗化せられ畢んぬ、之れ併しながら江戸ッ子が識見乏しきに因りしと雖ども江戸ッ子其者の罪にはあらざりしなり。

江戸ッ子の遺愛なる東京人は最も江戸ッ子の末路なり、凡そ都會の人種は常に多くの變化誘惑に觸接する者なるが故苟も一の信なくんば其輕浮なる俗化に魅せらるゝや尋常なり、江戸ッ子は德川武士なる勁敵ありしが爲めに、其武士道に對する一種の敵愾は大なる刺戟と成りて油斷するを得ず、少くとも不動の心はありたるなるべし、然るに東京人種に至りては忽然此壓力を撤去せられたるに心緩み、加ふるに鳳輦と共に各國貪利の俗物侵入し來りて都下は全く地方人種の爲めに蹂躙し去られぬ、不動心なき者忽ちにして其輕薄なる俗物に雜居して大に俗了せられたるや明けし。嗚呼地方或種の人種は罪なるかな、終に江戸ッ子を惡化して今日更に之れを指さし嘲り以て人物を喋々す、耶んぞ知らん今日汝等の指さす東京人は果して地方人種の明治に移轉せし者多きを、汝等何ぞ江戸ッ子を知らざるの甚しきや、乞ふ汝等をして江戸ッ子の心膓潔義滿々たるものを知らさんと、江戸ッ子地下に在らば叫ぶなるべし、余は此に於て更に進みて此誇唱する江戸ッ子の性質を解剖するの勞を取らんとす。

骨相學の眼光を以て若し此人種の顱骨を觀察し來らんには、耳の上部より其後側面の膨大したるを認むるならん、何となれば敵愾と破壞とは頗る其元氣たるを以てなり、而して後頭頂部は著しく發達して前額は割合に發達し居らざるとを見ん、何となれば情深くして自尊と堅固とは甚だ健かなりと雖ども寧ろ知識と查察力とは其缺點を現はすと多ければなり。彼が性質は雷の如し猛然と震ふ時は山岳も覆すべく』而して突如として鎭まる時は爽快にして晴空一點の雲なき如し、其理想は義骨と血氣との集合なる『男らしき』の文學なり、此性質と理想とは殆んど極端の性を現はす所にして『男は氣で喰へ海鼠は酢で喰へ』と戲る如きものは實に歯ごたへある傲骨者を好むの適語なり。其立つ時は破壞の猛勢ありと雖ども坐する時は温順なる仲保者なり、不義に怒り勢力に抗する夜叉なりと雖ども正義に服し慈悲に一身を捧ぐるの菩薩なり。寧ろ馬鹿正直にして賴まれし事は一寸も否まず、甘

んじて人の煽動に激揚して犧牲の先鋒者と成れり、故に彼れは盲目の小犧牲者なり。男性道の恥には身を殺して名を末代に賣らんとし、他の憐れには直ちに一身を托して利を吝む所なし、之れ即ち彼れが長所として叉短所の伴ふ性質ある所ならずや。固より俠客は其保護の恩を受ると多く從ふて之れを愛好するの點よりして、俠氣の氣象は間違ひもなく觀得し居りたるなり、故に俠客に似たる所少きにあらず、然れども俠客氣風を以て江戸ッ子の氣風と同視するを得ず、俠客は兩野駿遠三等を以て其出產地とし大坂を以て修業地とし江戸を以て歡迎地とす、其修業地なる大坂に輩出するの男達は自ら江戸の町奴と消火夫と其品德の點に於て大に劣る所の者あるを以て見るも、頗る江戸ッ子の氣風に鍛錬されたる俠客を出せしとを知るべし、故に江戸ッ子は俠客の感化を受け同時に江戸ッ子的の俠客を養成したりしなり。

凡そ何れの地方に至るも、其古風の氣象を見んとせば先づ其國の女子を見るべし、男子は交際に觸るゝと繁きが爲め其風化せられて變性すると速かなりと雖ども、交際に疎き東洋女子の一得として長く其氣風を保存し居るものなり、現今に於て江戸ッ子の氣象を見んとせば先づ溫和なる女子が物事に觸るゝ時の言行を細察し觀よ、頗る其特色あるものを見るならん、其婦女は甘たるき優男の愛語よりも寧ろ苦味走りたる酸味の異見にサッパリしたる愛情を欲し、甚しきは撫らるゝに柔佞と怒り、打たれて吾男よと喜ぶ者あるに至る。

斯く說き來る所を以て見るも江戸ッ子は熱血の人なり氣の人なり而して知識の人に非ず持久の人に非ず、是れ學問と坐禪は最も彼れを敎育すべき必要物たりしが、彼れは不幸にして此學と禪とに遠ざかると甚しかりし、即ち彼れをして大人物を出すと能はざりし所以とす、是れ併しながら彼れが下層の位置に發生したるの不幸より來るもの多し。其他愛と義俠との美德は彼れをして大に誘導すべき効果ありしと雖ども、下等階級の修養は目前の有形物にのみ多忙にして、形而上の觀念頗る鈍く、從ふて宗敎心少なく道德極めて卑く、理想亦甚だ狹小なり。其俠客より受けたる所なるべしと雖ども、男性道を尊びて殆んど一種社會の良心たらしめたる者は、恰も士族社會の武士道に於けるが如かりし、此點に於て彼れは地方的の觀念頗る强からざるに非ずと雖ども寧ろ個人主義にてあ

りし、其「權現樣御入國以來」と誇唱し又尊敬したりし如く彼れは全く德川政府の爭臣たり、故に眼中唯德川政府あるのみ、之れが爲めには忠諫的の愛臣たり、首陽山に餓死するの廉潔あらずと雖ども、田氏一族の孤島に義死する道義心あらずと雖ども、彼れは德川將軍の滅亡と共に命運を潔よく殉せず、小義にも全身を投じ微恩にも滿身を擲たんとせり、之れしなり。彼れが臣たるの思想は終に眼界狹小に陷るを免かれ彼れが非常に利己心を蛇蝎視して或一種の他愛に狂奔せし所にして、少しも橫着心の深みなく又謀叛の氣を巧む如き忍耐的の野心なく苟も卑劣を聽く時は戰慄して陰險佞邪を疫癘の如く厭惡し、唯一片のシヴァーリーを謠ふて氣力を賣り一身を『潔』てふ淵に投じて一世の愉快を思想境天地の間に恣まゝに爲したるの無邪氣なる小兒のみ、彼れが小供心の正直正義の餘り直行直諫して他の喜怒を眼中に置かず、時に反撥力を逞うして賣言葉より買言よと是認し、其語調の短急なると其烈火の猛性とより練上げたる得意の罵詈を放つに至ては、傍若無人殆ど敵の膽を寒からしめ、人をして大惡性の如く誤解せしめ、到る所人を凌ぎて寧ろ鷄口と成るとも牛尾たるべからずと戒め、常に群集の下位に屈せず、人をして謀叛者の如く憎惡せしむることあり、其敏捷なる快速なる又區々に戀々たらざる、其の淡泊にして斬味快き恰も砥を出たる新刀の如し、其『江戸ッ子』といふ文字と語調とは全然彼れを代表したるものたるを知る、嗚呼『子』といふ意味は全く彼れを離るゝ能はざりし、彼れ此文字を甘受して少しも名利的の人たらず終に志望を天下の上に熱注せず寂々として一小都府中に其思想境を描き居りしなり。彼れにして若し靈の洗禮を受けしめば、ペンテコステの祭日疾風天外より焰を載せて來り、一同震慄して猛奮し以て道の爲めに突進猛擊の强腕、彼の鐵騎の騎兵隊を作るや知る可らず、嗚呼彼れが千歳の遺恨は書籍と天道とに知己なく雄腕を懷いて其器を用ゆるに當を得ざりし不調子の境遇と之れなりき、誰か此殉難殉義の猛卒が末路を悲しまざらんや。千代田城靈ならば汝が此愛兒の遺骨、冷々たる嘲笑を悲しめ、秋露滿天精氣あらば誰か此不遇の古戰塲に一滴の涙を注がざらんや。

天知子感極まりて病腦爲めに熱し、急速に筆を驅りて思想愈々惑亂し文字紛雜益々文を爲さず、江戸つ子の爲めに一文を草せんとせし望みは、遲滯して終に考案を配列し來らず、遺憾此上なしと雖ども又憚らず。

批評

○保羅之傳

此書は、曩に立志之礎、及び、倫古龍の傳を著はしたる松村介石君の著なりとす。君は蓋しポーロを傳するに好適せる人なり。宜なり、一巻三百五十葉を貫徹して、同情と崇敬との念漲ぎり溢れたること。

若し夫れ、穿鑿の精緻、考證の濃密等を旨として此書を評しなば、倘ほ多少の遺憾なきにあらじ。殊に、ポーロの神學論如何んと云ふの一事に至りては、此書の顯揚する所ろ甚はだ足らざることを覺ゆ可し。然れども、此書、此著者の優所は自から他にあつて存す。山陽の日本外史は年月事實の點を以て評騭す可らず、此書の如き亦た其類なり。

蓋し、此書の優所は、ポーロが心情を忖度し、其意氣感想を明らかに書き出し、之に申分なき同感同情の念を寄せて、以て后生を奬勵する至大なるの所ろにあり。ポーロがガマリエルを敬して之に化せず、ステパノに敵して而して之に動くの狀を寫し、遂に、第十章の結尾に千斤の一句を揭げて英雄は英雄に感じ、豪傑は豪傑に動くと云へるが如き。又た、ポーロが、ユルサレムよりダマスコに達する迄、馬上一週間の旅行中、途上の山川風光に感慨し、心緒鬱勃、起感百端、或は決し、或は省みるの狀を寫さんとて、「頃柄夏の初め也」の一句に筆に起す所ろの如き。第十六章に、記者の回顧と題して、ポーロが猶太敎に執着し一意熱中せる心術を寫せる一段の如き。ポーロとバルナバとを比較して、强情と寛裕と、英雄と君子との別を畫き、ポーロの服する所ろ、著者が敬する所ろの唯一つの人物論を爲す一節の如き。又、ポーロとヤコブとを比較し、一方に行爲、嚴莊、祈禱、白衣長髮の人を置き、他方に、信仰、豪壯、自由、軀區短小面貌醜細の人を置き、輕評一番して「凡俗の眼よりは、ヤコブの方遙かに敬虔なる聖徒と思はれしなるべし」と嘲けるが如き。ポーロがデルシラの前に引出さるゝとき、慨然同情の念を寄せ、奮然として慷歎し、ポーロ今や一女子の見物となりて其前に出でたりとの罵しる一段の如き。並に、アグリッパ王の面前に出でたる光景を寫して、仰いでアグリッパを眺むれば筆を起し、ポーロが慷慨悲憤の念ひに同情を表する一節の如き。遂に、ポ

ーロが多くの愛弟子によりて慰さめを得たるを記し、夫れ熱血性の英雄ほど愛を慕ふものはあらざる也と辨ずるもの〻如き。皆これ、著者が非尋常の同感同情を張ぎらせ、以て讀者をして、知らず感泣せしむるの記事なりとす。

左れば、此書は、ポーロの傳と題すると共に、亦たポーロ傳を讀むの感と題するもの〻如し。惜しむらくは、英雄豪傑の四字を用うると、度に過ぎ、而も、眞人、聖者の外に尙ほ基督教的の英雄豪傑あるが如き感を懷かしめ、徹頭徹尾ポーロの一短所をも指摘せざるとを。

故に讀者もし、此の哲學的多血性の愛國家ポーロ。義俠的眞摯熱愛の傳道者ポーロの傳記を熟讀するに當り、彼が如何にして其主に忠なりしや、何如にして其傳道に熱せしやの所以を考がへ、第二百九十七葉「保羅は意志力に動きたるもの也、然れども其意志力の源動たるものは則はち彼がキリストの愛に勵まされたるに由る」の一節、及び、第二百二十二葉「保羅アテンスを去りて后は非常に謙遜したるものと見ゆ、曰く弱く且つ懼れ又多く戰慄けりと、曰く十字架の外何をも知るまじと、」の一段を念頭に掛け置き、而して后全巻一徹の主旨を捉らへて好く著者の眞意を了得せんとを勸む。

山月子

○近江聖人（村井弦齋居士著）

是れ博文館少年文學の第十四篇なり、村井氏輕妙なる小說風の筆法にて、近江聖人中江先生が言行三四を寫せり、惜むらくは、文に沈重摯質の氣を欠くが故に、讀み去て何となく俗氣の吹き通ふが如きを感ず、之を見て近江聖人の人物を知らんと欲する者は、必ず失望する所あるべし、たゞ少年の讀本として、田舍の子弟が志を養ひ德を建るとに於て、幾分の裨補あるべしと思ふ。

流讀の際、佳と思ひし文句一二を左に摘載すべし、

勇をもて萬人を制するも能く一人の心を服せしむる能はす、道をもて一人を感化すれば萬人皆其德に懷く、道に古今無し德に東西無し（七七頁）

藤太郞は遂に心を勵まして泣く〳〵我家を立出でたり、見送る母見返る子、滿天の風雪路悠々（九六頁）

其委しきは讀者の公評に任す。

○青年會月報

東京青年會より、其第一號を出版す。各地靑年會の中央機關となり、八方連交の助けを爲すとぞ。祝すべき也。スヰフト氏が基督敎徒靑年會と敎會との關係の辨あり、其中の一節に曰く、

靑年會は元來敎會の爲に成立つものにして靑年會自身の爲に運動するに非ざるとを福音主義の敎會に向つて約束し且つ保證するものとす。

基督敎徒靑年會は成べく有形の敎會との隔離を避けんが爲に云々。

辨說周密なりと云ふべし。

大西祝氏の「香川景樹翁歌論」に就て

と題する雲峰子が長文の批評を次號に掲載す

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雜録

秋窓雜記

第一

透谷子

かなしきものは秋なれど、また心地好きものも秋なるべし。春は俗を狂せしむるに宜れど秋の士を高うするに加かず。花の人を醉はしむると月の人を淸ましむるとは自から味を異にするものあり。喜樂の中に人間の五情を設了するは世俗の免かるゝ能はざるところながら、われは萬木凋落の期に當りて靜かに物象を察するの快なるを撰ぶなり。

第二

希望は人を欺き易きものぞ。今年の盛夏鎌倉に遊びて居ること僅は二日、思へらく此秋こそは爰に來りて、よろづの秋の悲しきを味ひ得んと。圖らざりき身事忙促として空しく中秋の好時節を紅塵萬丈の裡に過さんとは。然れども秋は鎌倉に限るにあらず、人間到るところに詩界の秋あり。欺き易き希望を駕御するの道は斯にこそあれ。

第三

我庵もまた秋の光景には洩ざりける。咽なきやぶるばかりにひよどりの聲々、高き梢に聞ゆるに、窓を開きてそこかここかとうち見れば、そこにもあらず、こゝにもあらず、窗を閉ぢて書を披けば一層高く聞ゆめり。鳥の聲ぞと聞けば鳥の聲なり、秋の聲ぞと聞けば、おもしろさ讀書の類にあらず。

第四

病みて他鄕にある人の身の上を氣遣ふは人も我もかわらじ左れど我は常に健全なる人のたま〳〵床に臥すを祝せんとはするなり。病なき人の道に入ることの難きは富めるものゝ道に入り難きに比しからむ。世には躰健かなるが爲に心健かならざるもの多ければ、常に健やかなるものゝ十日二十日病床に臥すは左まで恨むべき事にあらず、况してこの秋の物色に對して命運を學ぶにこよなき便あるをや。斯く我は眞意を以て微恙ある友に書き遣れり。

第五

萩薄我が庭に生ふれど我は在來の詩人の如く是等の草花を珍重すること能はず。我は荒漠たる原野に名も知れぬ花を愛

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

づるの心あれども、園藝の些技にて造詣したる矮少なる自然の美を左程にうれしと思ふ情なし。左は言へど敢て在來の詩人を責むるにもあらず、又た自己の愛するところを言はんとにもあらず、唯だ我が秋に對する感の一として記するのみ。

第六

鴉こそをかしきものなれ。わが山庵の窓近く下り立ちて、我をながし目に見やりたるのち、追へども去らず、叱すれども驚かず、やゝともすれば脚を立て首を揚げて飛去らんとする景色は見すれど、わが害心なきを知ればにや、たゞちよろ〳〵と歩むのみ。浮世は廣ければ、斯る曲物を置きたりとて何の障りにもなるまじけれど、その芥あるところに集り穢物あるところに群がるの性あるを見ては、人間の往々之に類するもの多きを想ひ至りて聊か心悪くなりたれば、物を抛ぐる眞似しけるに、忽ちに飛去りぬ。飛去る時かあ、かあ、と鳴く聲は我が局量を嘲る者の如し。實に皮肉家と云ふもの文界のみにはあらざりけり。

第七

夜更けて枕の未だ安まらぬ時蟋蟀の聲を聞くは眞の秋の情なりけむ。その聲を聞く時に、希望もなく、失望もなく、恐怖もなく欣樂もなし。世の心全く失せて秋のみ胸に充つるなり。松虫鈴虫のみ秋を語るにあらず。古書古文のみ物の理を我に敎ふるにあらず。一蟋蟀の爲に我は眠を惜まれて、物思ひなき心に思を宿しけり。

第八

芭蕉の葉色秋風を笑ひて籬を蓋へる微かなる住家より、ゆかしき音の洩れきこゆるは、仇心浮きて其が中を覗ひ見れば、年老ひたる盲女の琵琶を彈ずる面影凛乎として俗世の物ならず。その律調の端正なること今の世の浮華なる音樂に較ふべからず。うれしき事に思ひぬ。

第九

紅葉館は我庵の後にあり。古風の茶亭とは名のみにて、今の世の浮世才子が高く笑ひ低く語るの場所なり。三絃の音耳を離れず、蹈舞の響森を穿ちて來る。その音の卑しく其響の險なるは幾多世上の趣味家を泣かすに足る者あるべし。紳士の風儀久しく落て之を救濟するの道未だ開けず。悲いかな。

第十

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

わが幻住のほとりに、情しらぬもの多く住むにやあらむ、わがうつりてより未だ月の數も多からぬに三度までも猫を捨てたるものあり。一たびは朝早く我机邊に泣くを見出し。二度目には雨ふりしきる日に垣の外より投入れられぬ。三度目は我が居らざりし時の事なれば知らず。浮世の辛らきは人の上のみにあらずと覺えたり。

第十一

今の世の俳諧士は憐れむべきものなるかな。我庵を隔つること杜ひとつ、名宗匠其角堂永機住めり、一日人に誘はれて訪ひ行きつ閑談稍久しき後彼の導くまゝに家の中あちこちと見物しけるが、華美を盡すといふ程にはあらねど、よろづ數奇を備へて粹士の住家とは何人も見誤らぬべし。間數も不足なき程にあれば何をか喞つべきと思ふなるに、俳翁頻りに其狹陋なるをつぶやきて止まず。一向に心得ねば、笑つて翁に言ひけるやう、御先祖其角の住家より狹しと思すにやと。俳士をして俗に媚ぶるの止むを得ざるに至らしめたるものあるは余と雖之を知らぬにあらねど、高達の士の俗世に立つことその難きに思ひ至りて默然たること稍しばしなりし。

獨嘯偶錄

是空子

（三）詩歌愛吟

病を治するには、其症に隨ひて各種適合の藥あり、人の心病を療やすにも、亦如斯事を得べき乎。昔しは、宗理翁、其大躰を示しぬ。冀はくは、今の日進の教育學及び精理學によりて、更に其精わしきとを知るを得ん。余、自得する所多からざる中に、經驗上一つの味ある治療法を得たり即はち熱忙極緊の裏に古人の詩歌を朗吟し、以て淸風閑日月の天地に脱然逍遙するの方是れ也。此方によりて暫時熱腸を洗ひ、快然執着の氣を散らし、忽ちにして別乾坤に遊び、澤々津々たる樂味十分を喫するとを得る也。殊に大詩人の詩は、天道人情を包容し、宇宙の大理を說きて餘す所なし、之を歌ふて其敎ゆる所を味へば、天地の妙理皆な甘味を具備して極めて容易すく吾等が腹中に入る。實に詩歌は人品を造る一種の道德敎なり。

彼の詩歌を弄ぶものを惡む、又詩歌の德を知らずして其眞味を味わざるものを憫れむ。ことに偏固矯激の人、もしくは物

理に觧して靈界に出入せざる徒の如き、詩歌を朗吟して胸中に閑日月を照すことなく、天地を蝸蘆の如くにして、多く暗中に局促す、極めて惜む可きにあらずや。ダルヰン、末年に至り嗟歎して曰く、余が頭腦は事實を多く集めて法則を磨出さんとする引臼器械の如くなれりと見ゆ、余もし生涯を再たびすることを得ば、嚴然規律を定め、少なくとも一週一回詩歌を朗吟し、音樂を聽聞することをなさん、果して斯く爲すことを得たらんには、余が頭腦の或部分今の如く偏固陋屈することなく、今日に至る迄尙ほ生氣を存せしならんと。英國の巨老人、議院劇戰の裏ちに少時を窺みて、ホーマーの詩を愛吟する所以、畧ぼ察知することを得べし。

文界要報

脫蟬子

早稻田文學が谷に天眼鏡をかけて四方八方を睨み渡さるゝ記實先生の報告を讀まぬ人々の爲に、今の文學界の實況をかいつまんで報道するも全く無用の業にはあらぬべし。

小說界は相變らず寂々寥々たり、鷗外漁史の水波集不知庵主人の罪と罰、共に歐洲文學の面影をうつし出したるもの、匿名小說夏小袖一概に世評好き方なれど、これも佛の滑稽家モリエルを飜案したるものと言へば創作の部には入れ難し。湖處子の「まぼろし」浪六の「小萬」共に暑中前の作なれば最早評判も薄らぎぬ。新聞小說にては讀賣相變らず紅葉の艶物語を載するの外、漣、眉山、等の新作もちらりほらりと見受らる。改進は南翠の聲名。稍や落ちたると共に、小說界にうれしがらるゝ事少なくなりぬ。朝日には篁村三昧の諸家いつもの如く繁昌す。國民新聞は美妙字書の發行に忙しき爲め湖處子の清潔なる文字の外は槪して小說に冷かなり。

批評界も太だ賑はしからず。鷗外漁史の沒理想攻擊の後久しく論壇に立たず、逍遙子も記實報道の外萬丈の氣焰を吐かず。忍月居士は官海の底深く沈みて評界に浮み出でず不知庵主人も飜譯に從事して批評に倦めりと言ふものあり。國民新聞にはカーライル流マコーレー流の評論益盛になりて幾多少年才子の筆鋒なか〳〵に銳し。直接に批評界に關係あるものは青年文學の諸子、都の花の學海、謫天、二家、その他なほ機に應じて筆硯を硏く者は少なからじ。あらさがし皮肉家などいふ內に、城南評論のくちわる男なども尤も得意の狀あ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

り、正太夫も物我生となりて一挫折し、流行子となりて更に一頓挫し、今はいきなり雜報の項目に、かすかに其善罵劍の鋒先を露はせり。概するに遊戲三昧の評家の影のやうやく薄らぎて眞面目なる批評の氣運次第に進みたりと覺へて先づ喜ばし。作者評判記などいふもの書く評家の數はたしかに減りたり。

飜譯界は先づ賑はしき方なり。前に言ひたる水波集及び罪と罰の二書を除くの外、抱一庵、十八公子、等は新手の飜譯家として評判あり。鷗外漁史の筐中に見へたりといふフォウストは未だ出でずして却つてレッシングの作柵草紙にあらはれぬ、ツーレンタインも頓がて同じ人の手に成りて出づべしと聞く。マクベスは早稻田文學の名と共に高く、未だいつ果つべしとも知り難れど、世間には、次の出物の注文區々たり。鶴田氏のイリアッドも飜譯の新潮勢を促がしたるものにて先づ目出度し。無名氏の夏草もその道に取りては珍重すべき飜譯なり。この外に漢文學に一別して戲曲の飜譯早稻田及城南に萌し始めて、槐南寧齋等の詩家是が先達たり。

戲曲界は相變らず不振なり。梨園の評家と名乘出でたる鶴田喜一郎氏はあれども未だ戲曲家の名乘を擧たるものを聞かず。櫻痴居士のみ獨り盛なれども、戲曲界に桂冠を戴くものと此人とも思はれず。學海居士もこの道には熱心は熱心ながら若還つて船艚ぎ出す勇氣もなきにや近頃は絕へて其作を見ず。文界の要報概ね斯の如し。

書齋一興

●五才になる小女

おばあちやんの齒は大丈夫かネ？

おばあさん、

ナアニ、御覽、此通りだ、上がたつた二本殘へて居る切だよ。

小女

アレ、ほんとネ、ジヤ此そら豆の袋歸るまで預つて頂戴。

●夫

これ！女房ども、少し儉約せんじやいかんよ。

女房

それじやァ、あなたお酒から少しづゝへらすとしませうよ。

小説

一青年異様の述懐

戀愛を知らずして、戀愛を畫くは。殆んど素人の、水先案内を爲すが如し。況んや、異性の人の、戀愛に於てをや。されど彼は、誤れば人命を傷ふの恐れあれど、是は間違へばとて、人の笑を招くに止まると、鉄面にものしぬ。予は敢て、戀愛を說くといはじ。只其一端はかくやらむと。疑を大方に質すのみ。　つゆ子しるす

予は何故に、彼女のこと、個程までに、心に掛る乎、予が彼女に始めて逢ひたるは、たしか數日以前の事にてありき。其後予は、彼女の事に就て、思ふ外は、何事をも思はず。又彼女に再び逢はむとて、一二度予が友の家へ行きたる外は、何事を爲し來りたる乎を記臆せざるなり。只或る一人の友は、予が二三日前學校の窓に依りて、何日になく、沈んだる調子にて、何か考へ居たりしを、見しといへり。又一人は、昨日途中にて、予に出會しかど、予は只其顔を見たるのみ、彼が何をかいひたるに、答へずして行過たりと告たりき。去れば予は、例の如く、學校にも行きしものと見ゆ。然れ共予は記臆せず、予は只彼女の事のみを思ふ。予は實に、不思議なる人と、なりたる哉。予は素と、父母より稟けたる、資質と、加かも自からの修養とに依り、物に動せざる特性は確に、備へ居たり。此點は人よりも稱せられ、又自らも恃み居たりしなり。故に今日まで、如何なる場合、如何なる事變、如何なる人物に接しても、怖るゝ、周章る、驚くなどいへる事は、なかりしに、彼女に對しては、予は全く眼眩み、口呐し、耳聾し、恍惚として、自他の境をも、辨ぜざるものと、なりたるなり。是迄、强情なる男といはれたる予が、彼女の前には、一處女の如く、化し去らるゝなり。予が彼女の前にある時は、彼が予に、何事をか、命じ呉まじやと希ふのみ。予が全身は、彼女の前に捧げ物となる。予が特性、予が自負、茲に至て全く烟散霧消す。是抑何の理由なるや、予其所以を知らざるなり。嘗て聞く、昔し泰西の學者の間に行はれたる說に、知識の石(ストーン、オフ、ウイスドム)又は、聖哲の石、(フイロソファース、ストーン)てふ寶石ありて、此寶石は、鉛を銀にし、

銅を金にし、又能く不老不死の、仙藥を製し得るの、怪力ありとて、遂に其石の探求に、終生を擲ちたるの學者もありきと、若し彼女は、是等寶石の類には非る乎。予は深く之れを疑ふ。然れ共彼寶石の說は、只是學說上の、妄想迷信より出たるものにして、一人も之れを發見したるものなかりしといへば。今日斯の如きもの丶あるべき筈はなし。左らば愈彼女の怪力は、不可思議なり。彼が予の特性を奪ひ、予の本質を變じたるの事實は、昭々として數日以來予の眼に映ずる所予は實に其原因を、講求せざる可らさるなり。依て予は先づ彼女と始めて、相見たりし時に遡りて、夫より、順序を追ふて、考ふべし。予が最初彼女と、友人の宅に於て出會ひし時は、纔に一二語を交へたりしのみ。別段親密に、談話をなせしといふにはあらざりしかど、彼女が非凡の資質は、何處となく顯はれ、予は先づ之れに對して、敬といふ念起りたり。而して平素種々の關係よりして。婦人を土芥視し、若くは、惡魔視し居たりし予は、彼女の前に、いと小さきものと、なりたるが如き心地し。處女の如く、謹んで蹲踞り居たりき。此時よりして、予は實に、一般婦人に對する考へも亦大に變り舊時の予の考は、大に誤れるものなりしとを悟りたるが。夫れにしても、彼女の資質、少しく異樣なるやうに思はれ。一層深く、之れを探究したしとの念起りたり。是に於てか、事に托して友人に乞ひ。尙ほ一二回彼女に接見したり。其間言一言を交へ、語一語を加ふるに及んで。予が最初の、探究の念は勿論。予が本質さへ、全く何れへか消え失せて、予は却て予が全心を、彼女の前に捧ぐるものとは、なりしなり。他に何の事情も。何の關係もあるとなし。思ふに是ぞ世に所謂戀なるか。吁戀なり〱戀に相違なし。予は確に戀をなせるなり。テモ不思議、偏屈予の如きものも、遂に戀をなすの時機に、遭逢したる乎。扨も戀なり、戀としても、彼女は、實に不可思議の力を有するなり。さらば、其戀の原因は、那邊にありし乎。美くしき彼女の眉乎。凉やかなる彼女の眼か。さらずは閑雅なる擧止か。朗らかなる聲か。將又富贍なる才藻か。是等のもの素より、一瞥の價値なしとせず。然れ共予は、彼女の外に於ても亦、是等のものを見たりし。然れ共予は少しも、心を動かす事なかりき。但彼女に於て、異樣に感ぜし處のものは、彼が身より、放つ所の靈光にてありき。彼

女が、人を清くし、人を優しく化する。何とも名け難き氣に感ぜし時は、是既に予が、戀の人となる始にてありき。今や予が意識、予が情想は悉く彼女の事に就てのみ働らく。予は其外には、何事をも知らず。思ふに今若し人ありて、白刄を予の頭の上に加ふるとも。予は之れを　避くるとにも氣付ざるべし。吁予は憐れなる人と、なりたる哉、否予てふ人間は疾くに亡ひて。今は只戀愛の、分子より成立てる一肉塊が。彼女の爲めに、生きて動けるのみ。あゝさても〳〵。

いでさらば予は、此一肉塊としての予が。今や何を考へ。又一意專心に、何を企てつゝ、あるかを自白せむ。予が友は、予が未だ、戀を爲せりと、心付ざりし以前にありて。早く既に予をば、彼女に意あるものと察して。予の爲に具に、彼女の經歷を說き、目下の境遇をば語り。彼女は到底、何人とも、婚姻をなすまじきものなりといへり。予は彼女が、婚姻を爲すべき人にてあると否とは。素より予が彼女を、戀ふるに於て差支なき事なれば。予は之れが爲に、別に失意をもなさず。然れ共、其婚姻を爲さずといへる原因は。彼女が甞て、清からぬ男子に依りて、其性情を損はれ。夫より一般の男子に就て、全く絕望せるが故なりといへることを聞き。予は倘々以て、此一身を、彼女の爲に、捧げむとは、決意せしなり。然れ共予は、元來戀には無經驗なるものなれば。如何にせば彼女が、身邊を纒へる漠々たる愁雲を、拂ひ得らるゝ乎。又如何にせば彼女が、胸を塞げる、憂を開くの鍵とあり得らるべき乎。是等の事に就ては、予は實に三尺の童子が。宇宙間の大問題に關して、問を發せられたるよりも、猶且困難に思ふあり。先づ試に彼女に對して、あらゆる力を致すの、一親友たらしめよと、云ひ送らむ乎。否彼女は、容易に男子に、信を措かざるべければ。予が未だ彼女に知られざるに先だち、さる事を、いひ送りたらむには。却つて彼女の、憂を添ふるの、種子とならむも知るべからず。左らば予は寧ろ、予が信友の中に就て、最性情の優しき人を選み。而して彼女を、慰むるの友となさしむべき乎。否々之も覺束なし。假令其性質は、如何に、優しくとも。彼女を熱愛せざる者にては到底彼女の心を、和ぐると能はざるべし。吁予は彼女に、高潔なる愛情を有する點に於ては、恐く予に及ぶ者なかるべしと、自らも信ずれど、只予が元來武骨者にして、其方法を知らざるに苦しむあ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り、予が數日來の懊惱煩悶は、即ち是に外ならず。倘ほ一言すれば、予は彼女をば。失望の中に救ひて、多望圓滿の人とあらしめずんば、到底心を。安んずること能はざるなり。此點より思へば、予は寧ろ、予が戀愛の、彼人に於て、成就すると、否とを問はず。誰人にてもあれ、予よりも數等優れる人が出來りて、予の如くに、彼女を愛し呉れ、而して彼女をして、戀愛を感ずるの、幸福なる人とならしめ得なむには。予は予なる此一肉塊が、彼女の前に、無益なる供物とありて、徒に滅盡し去ることあらむも、予は少しも、遺憾とは思はざるなり。寧ろ彼女の爲に、之れを冀ふの、至當なるを信ずるなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

四才になる子供、姉に、

僕、れいちやんと同ド位い背が高い子、

姉　ナニ、そんなとが有ませう、ホラ丁度姉さんのお口んとこまでドやないか、

弟　ヤー、でもこつちの方はおんなドだ子、足の方は姉ちやんと揃ろてるもの。

摘要

○各地靑年會の狀況（靑年會月報第一による）

會名	名所	起原	會員	書籍館新聞縦覽處	集會	夜學校	會館
神戸靑年會	坂本村杉田病院東	明治廿一年	正三十六 准五十 名譽十一	百三十冊一ヶ所あり	新禱講義毎週、親睦毎日	學生四五十	借家
京都高等中學校		明治廿一年二月	二十四	九十冊	聖書研究、新禱、毎週、親睦講義、二日一回		
名古屋靑年會		明治廿二年一月	正三十四 准八 名譽卅八	百五十冊新聞縦覽處は[illegible]る益あり	聖書研究親睦毎週	計畫中	借家
大阪靑年會	西區土佐町一丁目	明治十三年	百二十二	新聞縦覽處あり	新禱講義毎日一回		廣大なる錬化會館を有す
仙臺忠愛の友倶樂部		明治廿三年四月	四十七内十七は本年に加はる	二百冊	新禱聖書一週一回親睦隔週大會年二回		借家
東京工藝學校靑年會		明治廿二年	八		新禱、親睦毎週		近隣の教會を借る
東京尋常中學校靑年會		明治十三年	十五				定りたる場所なし
東京靑年會	神田仲猿樂町七番地	明治廿一年組織を新たにす	正六十三 准二十五	三百部縦覽處へは毎日七十人程來見す	毎週三回の聖書毎週新禱親睦は臨時	六十	借家

○尋常中學校卒業生

大日本教育會は府縣立尋常中學校卒業生の方向如何を調査するに決し同校長に其調査統計表を製し同會に報告せんとを囑して此頃全く報告濟となりたれば之が統計を製したるに左表を得たりと

實業に從事する者	
〔農工商業に從事する者	六二
〔家事に從ふ者	二〇九

學業を修むる者	
大學及高等中學に入學する者	三七二
官公私立學校に入學する者	五〇三
外國留學の者	一三
教職に從事する者	
小學教員に從事する者	二八二
官公私立學校に從事する者	一三二
官吏となる者	二二三
民間庶業に從事する者	四七
兵役に從事する者	六二
未詳の者	三五五
死亡の者	四二
合計	二三〇四

片々

●信教自由に關して基督教青年會の運動　去る八日、帝國大學、第一高等中學、高等商業學校等を始め、各官立學校內に在る、基督教青年會及び府下各教會附屬の青年會等の代表者は、神田猿樂町青年會館に會し、全國の各青年會と相提携して、運動せんとて、其方針等を協議せりと。

●各地青年會の連合　本年の箱根夏期學校に於て、各地方より集り來れる青年會員は、相集りて懇談會、及び相談會を開きて（第一）各地青年會運動上の連合を計る事、（第二）連合の機關として東京青年會を中心として月報を發刊する事（第三）各會互に訪問奬勵をなす事（第四）毎年夏期學校と同所及び同時に青年會の年會を開き、運動の考案を議し且親睦する事、且右年會に關する事件に付き相談する爲め及び各會運動連合相談の爲に、札幌、仙臺、東京、名古屋、京都、神戶の教會より一名づゝ委員を撰び置く事、但東京は二名、等の議決をなせり、其聯合委員として北海道札幌農學校青年會よりは星野三郎氏、名古屋青年會よりは時田大式氏、東京青年會よりは丹羽清二郎氏を撰擧せりと、而して青年會月報第一號は、去る七日第一號を發兌せり。

●東京青年會の運動　（一）新會館を建築し初めたり、費額は三万圓の見込也（二）夜學校は本月十二日を以て開學せり（三）說教は日曜日教會に於て說教なき時間を撰び、毎日曜日午後四時より始む（四）講演は毎月二回有名の士を聘して之を開く（五）書籍室には木村駿吉氏、毎木曜日の夕同會に赴き書籍目錄の調製に盡力され、青年私行上の清潔を保つ爲に有益の小冊子飜譯を監督せらる（六）新聞縱覽所には平均六七十名の觀覽者あり（七）聖書研究會は、水曜日午後八時、土曜日午後四時、日曜日午後三時より始まるといふ、吾人は一方に於て、其規模の廣大となりて、其益々便利に赴くを喜ぶと共に、他方に於て、更に質朴、剛健、熱烈の氣風を養成せられんことを切望するもの也。

●クラーク氏の來朝　先頃米國を發して世界巡遊の途に上られたる基督教青年勵精會の會頭博士クラーク氏は、愈々來月十日頃橫濱に到着し、凡そ八日程京濱の間に滯在せらるゝ筈に付、內外有志の人々は氏の爲め集會を開かんとて、今より其準備を成し居る由。

●世界青年會祈禱週間　は十一月六日より同十三日に至る間にて、六日は各教會に於て、特更に青年の信仰上修德上に必要なる說教をなし、其週間中は或は祈禱會或は奬勵懇親會等を催し、專ら青年の爲めに有益なる運動ある由。

正誤　本邦森林安固之度

前號に掲げたる右論文中の正誤左の如し

片	段	行	幾字目	誤	正
一三六二	上	二一	一四	紅	灰褐
同	同	同	一七	鬼	兎
一三六三	上	七	二〇	す	な
同	同	二〇	二三	菅	苔
同	下	一一	二〇	中	存
同	同	二二	二六—二七	（一字脫）	護
同	同	二四	二八	斧	蟲
同	同	二五	一〇	國	園
一三六四	上	一	一五—一六	（一字脫）	享
同	同	一一	三二	き	く
同	同	一二	二五	の	（可除）
同	同	一四	七	て	子
同	下	一	二	の	に
一三六五	上	三	一七	さ	を
同	同	一五	二二、二九、	が、に、	（可除）
同	同	三二	二六、二七、	よ、り、	な、ら、
同	下	一九	二六、三四	森、震、	林、農、
同	同	二三	三—四	（廿五字脫）	山林地、原野地、宅地、荒地、鹽田等ノ合計トチ比較シマスレバ
一三六六	上	一	二四	會	よ
同	同	二〇	三〇	器	品
同	同	二一	三	寶	貲
同	同	二五	二六	格	本
同	同	三〇	一二、一四、	貲、線、	格、接、
同	同	三二	五、七、三三—三四、	要、頁、（二字脫）	る、頁、の
同	下	三	一五	土	林
同	同	四	一四、二一、	學、さ、	勞、と、
同	同	一〇	一一	羅	鄧
同	同	一四	八	入	加
同		一六	二八	漫	侵
同	同	一九	五	な	と
同	同	二一	三	に	は
同	同	二四	一三	木	本
同	同	二六	三五	絲	時
同	同	二七	四—五	（一字脫）	百
一三六六	上	一〇	一三	倍	位
同	同	二四	三〇	遺	用
同	同	二六	六	此	皆
同	下	六	一二	害	（可除）
一三六七	下	一二	最下	耕地	（可除）
同	同	一三	最上	（二字脫）	耕地
同	同	二〇	一〇	か	に
同	同	二四	三	割	分

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

かけて倒れたるに驚き、遂に黒き王子を生み、或る母時計のことを切に考へしに其子の顔の上に時計の形あり〱と現はれたり(デマンゲチン氏の説)如此き實例多く、ドクトル、ナフュー氏の、フヒジカル、ライフ、チフ、ウーマン、百八十一頁以下にあり。

(五)、此等の實例によりて既に明なるが如く母の精神の何如んは其胎兒の身躰の上に非常の影響を及ぼす、母もし神經質ならば幾度か胎兒を驚かせて其未生れざるに於て既に早く之を弱くせしむべし、グリーキの婦人美なる像を寢室に置き、その胎子を美にせんとしたり　然れども躰貌の美なるのみにはあらず、壯健々康の子は必ずや信切なる胎教の結果にあらずんばあらず、他日教育學上躰育の行はるゝと否と、既に此時に存す。

三段　心靈上の胎教

(一)、其感じ易きことを言はゞ身躰は心には及ばず、胎兒の胎内に存するや、全身之れ肉の如く、全身これ心の如し、心と肉とを分つこと甚だ明ならずと云へども、然れ共其所謂心なるものは即はち、その肉躰中の尤も鋭敏なる尤も靈活なる所なり、母の精神すでに胎兒の身躰の上に影響せず、何をもてか更に感じ易き胎兒の心の上に影響する所なからんや。

(二)、我は是れ主の使女(ツカイ)なり爾の言る如く我に應(アレ)かしと、この信深く情潔よき乙女こそ「クリスト」を胎内に宿して、その最と清き、心の上に汚れざる感化を生ずることを得たるなり。又エリサベツ、マリアの話を聞きて心動き、胎兒腹の内にて跳れるほどに喜こびたり。この二人の高潔なる婦人三日の間だ共に住ひ、神の惠を談じ、贊歌を歌ひ、一身を天に獻げて胎内の聖き兒を守り養なひたり。夫れザカリアは、ヨハネを胎み、マリアはクリストを姙らむ。彼等皆な其生子の前途を察知し、腹中に神の人を宿して其間心の殿なりしこと、抑も何如斗りぞ。吾等今より之を推察し如此き婦人あるによりて則はちヨハネ、クリストは、天の命じ玉へるまゝの最と清き姿にて生れ出でたりとは思ふ。

(三)、美術家、フラックスマン氏の母は、氏を生む前數ヶ月、日々彫刻を學び深く美術上の思想を養ひたり、故に言へらく、其子の天才は胎教に成れりと。昔し日輪懷中に入ると夢み又巨人の足跡を履めりと夢みて遂に偉人豪傑を生むに至れるなど、母が平常深く心中に偉人豪傑を慕ひたるの結果ならずんばあらず、胎教の、重んず可きこと之によりて、明かなり。

第六章

母の感化

一段　母の重任

(一)、胎育の章を畢り、次に幼稚園の章に遷らんとするに當り、玆に母の感化に付きて講述するの適當且つ切要なることを感ず。キルク、ホワイト曰く、吾等が歩み何處に彷徨ふとも、たとへ打笑める野原を行き樹なき荒野に迷ふときも裏樂しき記憶の思ひ吾等を導きて、母よ汝が膝下に吾等を招くなり、母の感化畢生決して消ゆ可らずと、蓋し母の感化は一生に渉る、之を其幼時教育端緒の時にのみ存すと思惟すべきにあらず。左れど其感化の最とも重大にして而も其影響の一生に汎れく行渡ることを思ふときは幼稚園の章を講じ出さゞるに當り、玆に先づ其梗概を盡すを適當なりと信ず。

(二)、苗木の外皮に極めて微かなる印しを刻み置かんに、苗長ずると共に其印擴張し膨大し遂に著明なる符徴とならん、人も亦た斯の如し、其少時に於て與へたる些少の感化は年と共に增長し自らにして至大の影響を生じ來る故に人の一生の大要は既に母の膝に抱かるゝの時に決すべし、西國立志篇に云く、或婦人四五才の少兒を携へて或る宣教師の許に到り師よ此兒は教ゆるに尙早きかと問へり、教師答へて曰く、否な、既に晩れたり、孩提の子汝に抱かれ汝の眼光に射られ、汝の溫顏に溫められ、片手に一の乳房を握りて一方に乳を吸はん其の時既に汝が教育は初まりたるなりと。母は其子を胎内に宿すとき既に教育の念なかる可らず、況んや既に之を產み、之を愛の双手にて抱くの後に於てをや。

(三)、渾沌として天地未だ分れず、六合濛々として萬物未だ定らざるとき、命じて玆に萬の物を創造し玉へるは愛ある神の大御心なり。其れ、人未だ世に生れず、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其運命未だ天の大帳簿に記載せられざる中、第一に其種を宿し、辛苦十月、苦慮一生に償ひし、産みの苦しみにも尚ほ優りて案じ煩ふは母なり、月滿ちて曉の天明くると共に人世に一個の新しき靈物生れ來る、第一に其快絶なる泣く聲を聞くは母なり、最初に之を抱くも亦母なるべし、此兒の生命は縷々として斷へざる細き糸の如し、之を維ぎ之を太くし、之を伸すものは父母の乳養と愛育とのみ。天下を震動したるナポレヲンも幼き時は其母の一呼吸の内に生死の運命を任たるなり。社會學に曰く、家族は母と子とより初まる最初は父を含まず、况んや他の親戚を混せずと。又曰く、愛は家族より初まり、文明も亦家族より生ずと、而して母と子とは家族の初めなり、アヽ母と子と云へる驚ろく可き妙なる言語の如きもの他に尚ほ存するや何如に。チヤールス、キングスレー曰く、全世界に母が子を抱くの狀よりも更に美なる景色何處にありや、ラフハエロは此稀なる景色を寫さんとしたり、數度び之を試みたり、然れども遂に心限り其美を寫し悉くすと能はざりきと。

(四)、天父が人を世に生ずるや所在る手立を盡して、その發達の上に念を掛けさせ玉ふ、而してその大御心に安んじて之を托し玉ふ所ろの人は、即はち母なり、天の父は其愛子を先づ世上の母に托し玉へり、母は人世に於ける第一の創り主第一の保護者、又第一の教師なり、母の愛は最と切なり、而して其子の爲には驚く可き勇をも兼備したり、天下母がその子を愛するが故に愛するの勇の如く勇なるものは未あらず、ルッソウスは感じて曰く、娘は弱はし、左れど母は強しと、母は尤も鋭敏なる眼を以て更に尤も鋭敏にその子を看視す、子の病氣は先第一に母に知らるゝなり、子の惡僻は先第一に賢母に指摘せらるゝなり、母の觀察のその子に徹するや兩刄の劔よりも鋭く光線の暗きを照らすよりも明らけし。

(五)、母は斯る至重至大の天職を負へり而して又斯る無上無限の幸福を荷へり、その子は親らの子に非ず、天與の人を托せられ之を天父に似る所の人に發達せしめ以て、世に出すは其責任なり、使命の神聖高潔なる他に之を比ふべきものあらんや。故に、人の一生の榮枯盛衰は先づ種を母の膝下に於ける孩提のときに兆す、一家一國の興亡起伏早く此の隱微の所に决すと知れ。

二段　偉人の母

(一)、古今の史傳を考ふるに凡そ愚父に賢兒はありと云へども、賢ならざるの母より良き子を生じたると至て稀なり、英傑偉人は皆な賢母の膝下に生育し來りたるものなり、ラウラ、ホルロエー前年 'The Mothers of great men and women と云へる覩るに價値多き書籍を著はし、此の理を證明したり而して、この書の著者は亦た母の感化を尤も切に感謝したる一人なりしかば、則はちこの著書を捧げて、亡き母に「デジケート」したり。

(二)、今左に古今尤も著名なる偉人にして而して、其母の感化を尤も切に感謝せる人々の實證を列擧せん。

(三)、セント、アウガステンは、其懺悔の記に曰く、神よ汝に忠なる婢、余が爲に汝の台前に泣きぬ、その泣くは、世の多くの母がその子の肉躰の死せるに泣くとは異なれり彼女は余が躰は生たりと云へど尚ほ死せるを知ればなり、然るに汝は彼女の涙を輕んじ玉はず、彼女の涙流れて何處の地を潤ほすときも其地に汝の惠降りたり、…………彼女は遂に勝ちぬ、神は祝福を與へ玉へり、ナインの寡婦が其子を奪ひたる態を追へるが如く彼女が痛泣遂に「吾汝に云ふ、起てよと」の御聲を汝より得たりき…………アヽ余が持てる惣ての物は皆な母より得たり、ナヽ吾神よ、吾いま汝の子たることを得るとせば、そは汝が斯る母を、吾に與へ玉ひしによる、吾が眞理を重んずるに至りしは、母の教示による罪と不運との爲に早く余が死せざりしは、母が余の爲に信實の涙を流し、之を謝し之を償ひ玉ひしによると。

(四)、ジョン、エスレーの母、スザンナ、エスレーは基督教徒の母にして近代高く理想せらるゝ人なり、其家を脩むるの法、其夫に仕ふるの道、其人を教導するの術皆以て人の鑑となすに足りしが、就中く、子を育するの道に至つては、萬古の模範と云ふべし、特に多くありし子の中ジョンを取分け重んじ此子は必ず神の御役に立つべきものなりと信じ、在ん限りに愛育したり、后に、ジョン、エスレーなる偉人物を生じ、遂に教派中の尤熱心なるメソデスト派を造るに至りしは皆母スザンナの感化による、ジョンは母を葬むるの時、尤も有名なる說教をなしぬ、一生百回の演說は何れを優れり、劣れりとすべからず、皆神の言葉に近し、然れども、その母を葬送する時の說教の如きはあらずと云へり、ウエスレー一生母に感謝するの衷情悉く、此中に煥發したり、又母を埋めたる墓地の碑塔の初句に云

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

く、

茲に一個のクリステアン冠に代て十字架を懐き、大空にその住家を要めて、更に起たん日を最も確かに固く信じ、望み靜に其肉を置き玉ふ。

一個の「クリステアン」と云へる此の「クリステアン」と云へる一語は何如に能く此の母の一生を評したるかを見よ。

(五)、ナポレチン、ボナパートは、其勇猛なる性質を母に付て遺傳し、常に之を紀念感謝したり、嘗て云く、母は優しきうちに嚴格にして賞罰共に極めて嚴かなりき、善惡ともに、母の監視を逃るゝとなかりき、母は比類なき掛念をもて、吾を監督し、唯一の卑き感情にても只一の大氣ならざる情愛をも、必らず制止し、玉ひたり、而して、吾が少年の智性の上に宏大雄高なる事々を深く根ざゝしめんが爲には、何如なる苦勞をも取り玉へり、母は僞を惡み玉へり、吾もし、之に背かば激怒して、之を制し玉ひき、母は吾が過失の一をだに、寛過し玉はざりき、と、ナポレチン晩年孤島に流され、つらつら過去を追懷して坐ろに感慨に堪へず、お止みなく書狀もて慰め玉ふ母を思ひ想ふて云く、アゝ吾が母は吾爲とあらば黑き麵包を食ひ玉ふとも、一語の不平を述べ玉はざる也、高大なる感想は母の胸中に滿ち充たり、その高尚偉大なる大望は嘗て、私慾の爲により屈服せしとなしと。

(六)、米國の大統領は、平民より出でゝ、之に登りたるもの多し、一分の貧書生卒然高きに登るに至りたるは其素養多く母の手にあり、ジヨン、クインシー、アダムスは、大統領となるの原因を其母に歸し、アブラハム、リンコルンは一生、其母の感化を忘れず、ゼームス、ガーフヒールドは、大統領となるの日、其母の恩を感謝したり。而して、此等多くの大統領の母は、盖し、初代大統領ジヨージ、ワシントンが賢母に倣ふ所ろあるにあらざる乎、ワシントンが母メレーの賢なると、及び其、何如に重大なる感化を此の偉人の上に與へたるかは、今更に詳說するを須ひず。

(七)、此等の偉人は、皆な其母の感化によりて成れり、その母に感化せられたりとの語は既に確かに此を證するのみならず、彼等が母は實に寡婦にして良人なき孤捿獨居の内に、その雙手を以て遂にかゝる偉人を養成したるものなり、モニカも久しく寡居したり、レチーアも四十五年間寡居したり、メレーも、ジヨジが十一歲のとき以來寡居したり、夫れ寡婦の子に如此き偉人多くあるを見て、子の發達に母の感化の如何に重大なるかを確認するとを得ん。

(八)、左れば、神聖の改革者、祈禱の軍將、セオクラシーの政治家たる、クロムエルは、エリサベス夫人によりて生れ、宗教改革者、高大なる偉丈夫、ルーテルはマルガレツト夫人によりて生れ、道念雄高、理想純潔の大詩人シエクスピアは、マリー、アルデン夫人によりて生れ、道德の大教師鬱勃痛絕の慷慨家カーライルは、マルガレツト、アイトケン夫人によりて生れ、女流文學者の泰斗、愛國正義の女丈夫マダム、デ、スタルはネツケル夫人によりて生れ、其他、カント、エルリントン、ゼチヂ、エリチツト、の類皆な、有名の母あり。

三段　賢母の德

(一)、賢母の德は、略ぼ前段に舉盡したり、余はこゝに、古今著名なる人が、母に付きて何如に賞揚するかを示し、更に賢母の美德を發揮せしめんとす。

(二)、カーライルは曰く、

余が母は、總ての母の中の尤も善き母なりし、余は母に對して限りなきの謝恩を負へり、神の惠に因り余が母は今も尙、余が頑、余が心として遺されたり、若し神許し玉はゞ、願はくは余が多くの困苦の間に於て、母が恭敬なる英氣によりて、余を慰め玉へ。

(三)、カントは曰く、

余が母は愛深く情切にして、恭敬正直なる母にてありし、而して、其恭敬なる教と有德なる摸範とにより神を寅るゝとを余等に教へ玉へり。

(四)、ワシントン、イルビンは曰く、

母と子とを結付くる結は、最と純精潔白なれば、腐敗したる社會その感情を枯らすにあらずば、嘗て破るゝとあらず、其成立は、神聖に飾なく、且美はしく、凡そ吾等が正直眞理の德に付きて想像し得る限りの淸德は、之に備はる。左れば、此の結びは榮光ある結びにして、吾等は搖籃中にあるとき、よく其價を感じ、母を塵灰に碎き去る墓の端邊に至りて、その消失するを歎く、吾等が誘惑に會ふとき吾等が苦痛に沒するとき、母は吾等の側に居ます、吾等罪を犯すときは、怒よりも寧ろ悲しみをもて吾等を非難す、母は吾等をその胸より離さず、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

吾等が子たることを、嘗て、忘れ玉はず、

(五)、母の偉德を稱するの言葉此他雲の如く多し、一々擧盡すこと能はず、左れど、悉く之を擧ることも尙ほその德を言ひ盡すこと能はじ。

四段　一生の最大感化

(一)、此故に、人一生の最大感化は、その母より來る、そは、母が愛の尤も溫かなるによる、又母がその子に接することと、尤も近きによる、又母が、その子に接する尤も早く、尤も感化し易きのときに於けるによる。

(二)、故に人を知らんと欲せば、其行を見、其友を見るに先だち、先づ其母を見るを可とす、又國民の氣風を知らんと欲せば、其國の母を見るを可とす、母は、國家人心の出車場なり、故に神聖の教育は母より初らずんばある可らず、母先づ改らずば、教育決して改まることなし。

(三)、誰か荊棘より葡萄を取り、蒺藜より無花果を採ることをせん、然らば、何んぞ輕薄なる浮れ女より豪傑を生じ、淫猥なる戯れ女より義人を生ぜんや、然れば、母先づ純潔剛貞にして、その子を感化せずば、邦家の人心遂に改まることあらず、マーデン、ルーテル曰く、老たる犬を從順にするは難し、老ひたる惡る者を敬虔にすること難し、然れども彼の若き草木は更に容易に矯むることを得る也と。ミルトン歌て曰く、彼の朝たの一日をトする如く、幼稚は即はち、後代の大人を現はすと。ロード、ブルーハム、は、精密なる觀察の後に曰く、小兒が生れてより、一年半乃至二年半に至るまでの間に、世上の万物を知り、己が力並に他の物躰の性を知り、更に己の心及び、他人の心を知ることと其殘る一生に於て學び知るよりも多しと。スマイルス、之に續ひて曰く、ブルーハムが所謂る此初代なる者に於て小兒が學び得る所の知識の、尤も價ひあるや、後年ケムブリッヂ、又はチックスフホルドの大學校に於て、最上級を占得たるの智識よりも尊とし、故に若し、假りに初代に於ての彼智識を失ひたりとするば、後代に於ての此智識を得たりとするも、譬へば生命を、一週間維持延長する丈けの價證なら有せずと。

(四)、故に、詩人トマス、ナトエーの曰く、

母は、其天職として、人の靈魂を開くの鍵を所持す、人の品質の貨幣に印を烙するは母なり、母の溫和なる注意なかりせば、蠻人となるべきの人を代て、一個のクリスチアンとなし、之を人物に造るは母なり、母は全世界の女王なりと、

フレーベルが、幼稚園を、開らくの主旨、亦た此に淵源す曰く、

人間の能力の正當なる方向は、必ず其幼時のしのゝめに於て教練せざる可らず、故に、人をして、尤も順序正しく、尤も調和宜しく發達せしめんと欲せば、教を怠りたることによりて、又は教を過度にしたることによりて、又は教を誤まりたることによりて、未發達の方向を誤まらしめざりし以前より、先づ早く正當に教練せざる可らず、と、

(五)、ロッキー山上に、二の小き泉あり、距離遠からず、高低亦、畧ぼ同じ、一を轉じて他に入らしむること易々なり、然れども、一は東に流れて、ミシシッピー河となり、一は西に流れて、コロムビヤ河口を過ぎて、太平洋に入る、此に至れば、一万餘尺の山を隔て、五千餘里の道を離る、人も亦如此し、その少時に於ける方向の同異により長ずるに隨て、善惡の大懸隔を生ず、至大なる感化は幼時にあり、幼時の影響は、一生に流れて絶ゆることなし。

五段　國風一變の源

(一)、チャムバレン曰く、日本人創造のものあることなし、唯一あり、和歌是れなり、而して和歌の殊性を論じて曰く、和歌は單純なるものなり、宮殿の華美を擬めたるものなりと、思ふに此の和歌は眞に能く、日本人の、特性を代表す。

(二)、和歌は、淺々しきを好とす、單純淡泊にして、スラ/\とするを好とす鬱勃慷慨にして理に深く、義に激するを嫌ふ優々たる貴族的にして、勤勉力行の風なく、偉大高壯の氣象なし、而して、日本人の氣風は、宛がら之に類似す。

(三)、外國人の、輕薄なるものは、日本人を評して、溫柔なり、禮節あり、雅致あり、物事に執着せず、謙遜にして、驕慢ならずと云へり、斯る評は、西洋人が、喜んで唱ふる所ろにして、而して正に日本人の病に適中するものなり、かゝる趣好は、蓋し肉食の後ち、茶飯を喜ふに同じ、故に嚴しく日本を觀察し、其の病所を直言したる人は、大率ね曰く、輕薄にして眞理を重んぜず、淫猥にして、謹嚴ならずと、之れ實に謝受先考す可きの評なり。

(四)、此の輕々しくして眞理を冷喇するの人民、此の不熱心不執着なる好人物、此の淫奔卑野にして、永遠高大雄壯義烈の事を景慕せざる國風は如何にして改む可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學生第廿八號 十月二十一日發兌

永嘉先生の聲 は天地子の筆にして、短評の内、深刻博大の意を含む之を讀んで躍然快を呼ぶ者あるべし。

時の感 は年少批評家禿木子の手に成る、其 **和歌と發句** は國民之友に出し愛山生が平民的短句の發達を遠慮なく批評し **詩人バイロン卿** は快筆を以て簡明に卿の傳を記せり其他二千六百年前の支那、最近文界、夏小袖の評、何れも簡潔明快なり。

文欄 女學生諸子の文は、時恰も悲秋に際し、其多感多情の筆は、發して悲哀の調をなす、尤も見るべきものあり。

家内の修養 は靈眼を以て家政を觀察講述す、言ふ所、頗る則となすべく、範となすべし。

中秋雜感 は(十六)あり、山月子の記する所、愛と誠と涙と血とを全篇に横溢さす、世間必ず同感同情の友あるを信ず。

南洋の嶋影 には小笠原島の奇觀を記す是れ蓄勳子實地探撿の筆

其他 何れも清秀にして且愉快也 **本號の紙數** は二頁を増加せり

●女學生毎月一回發兌●一冊價四錢●郵稅五厘●

東京下六番町 **女學雜誌社女學生部**

透谷子著

蓬萊曲

幽玄を旨としたる戯曲

場を蓬萊山に假り心を死したる戀人に寄せて大に天地の美妙を說き人間の醜惡を罵る、一篇の結構全く幽玄を旨とし、或は神、或は鬼、或は生、或は死、或は龍、或は月、是等の物を馳驅して縱横に深鬱なる悲戀を述作す。題して蓬萊曲といふと雖實は地獄と天堂の間に蹈迷ひたる一想士の感慨を述たる悲壯曲にして、日本評論がドラマチック、ポエトリーの嚆矢なりと評したるもの即ち是なり。

正價十六錢の所を此度半減して八錢とし以て女學雜誌購讀者の愛顧に酬ふ
(但し別に郵便二錢を申受)

依托賣捌元 女學雜誌社

女學雜誌社出版書

子供のはなし 全

定價金五錢
郵稅金貳錢

目次

第壹回 田舎音樂師
第貳回 菫の君
第三回 熊と旅人
第四回 凧と日の喧嘩
第五回 ハイ〳〵トタヾイマ
第六回 カンとクッドの話
第七回 王にも勝てる人々
第八回 母の愛
第九回 柔順なる娘
第十回 英雄の所業

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

護教

體面一新して活氣百倍す、請ふ之を本月十五日發行の第六十七號に徵し去れ蓋し思半に過ぎん全紙分て十欄を設く

「說敎」は平易あり、福音的なり、每聖日に講壇より落つるの聲は、反響して本欄に聽ず、敎會に出席すること能はざる兄姉と雖も之を讀まば遺憾なからん

「摘要」「評論之評」論及び「社說」舊に依つて眞率なり眞截なり奇警なり、嶄新なり、自ら是れ本誌の特色

「公報」は新に設けたるもの各敎會の公報一目燎然

「通信」は更に益々其の數を加ふ、正確にして着實、詳細にして親切、何人も之を見て喜ばざるなし

「敎勢一斑」は宗敎社會緊要の時事なり莊重なる批評眼を以て現時日本の敎勢を洞觀す特に各敎會敎役者の人物を品藻して、大に後進有爲の士を紹介す、公直なり、嚴正なり、明快なり、座ながら宗敎界將來の趨勢を揣摩するに足る、宗敎に關係ある人々のみならず經世經國の志ある者、必ず一瞥せざるべからず

「特別寄書」は基督敎會の有力者に請ひ、其の秀抜傑特の論說を掲ぐ、「寄書」亦た卓出超絶精神あり氣魄あり、

「家庭及少年」は何人にも愉快に讀まれ、何人にも利益あり、殊に將來の新國民に向つて、誘掖慫慂を與へんと欲す、故に其の史談は雄壯なり、其の小話は簡潔、其の家政家事に關する細大の忠言は實際にして有益なり、又た時としては

「王女會紀事」を載す、巾幗の一隊が如何に働きつゝあるかは請ふ本欄に就て看よ、

「詩歌」は高尙典雅、一唱一吟、敬虔の念生じ清新の氣、胸中に滿つ、

要するに『護敎』は斯の如く長大足の進步をなし斯の如く紙面の完整をなすに至れり、是れ偏に讀者諸君の眷顧に依る、若し夫れ一躰に平民的にして誠懇なるは世上自ら定評あり、江湖の諸彥、請ふ刮目一番せよ

東京京橋區竹川町九番地

護教社

護教定價表

	本紙二葉八頁	前金	郵税共
一部		金二錢五厘	金三錢
三ヶ月	十三部	金三十一錢	金三十五錢
半ヶ年	二十六部	金五十八錢	金六十六錢
一ヶ年	五十二部	金一圓十錢	金一圓三十錢

廣告料（五號文字二十二字詰）

	一回限	二回以上	五回以上
一行以上	金六錢	金五錢五厘	金五錢
十一行以上	金五錢五厘	金五錢	金四錢五厘
廿一行以上	金五錢	金四錢五厘	金四錢

鈴木弘恭大人著

再版増補

文法口授 一名和文獨案内

（半紙判日本綴）

特別賣價 金拾二錢 郵便税 金二錢

目録

（一）文と云ものゝ譯
（二）章句段節の譯
（三）文を作るは容易なる譯
（四）多く文を作るを善とする譯
（五）文を作る工夫の事
（六）草稿の譯幷に書方
（七）文を練磨する事
（八）文を作るに病癖ある事
（九）佳篇を作る法
（十）文を培養する法
（十一）種々の文例

東京麴町區下六番町

女學雜誌社

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

少年文庫

毎月一回（十五日）發兌〇〇大版八十頁〇定價一冊金十錢〇〇六冊（半ヶ年分）前金五十五錢〇〇十二冊（一ヶ年分）前金壹圓〇郵税一冊金一錢〇見本は郵券十二錢を要す

少年文庫は明治二十二年八月の創刊にして、號を重ぬると四十有餘、其間江湖少年少女諸君の機關となり、親友となり、智識の交換塲となり、利益と娯樂を與へしと莫大なり、是を以て大に好評愛顧を博し、今は全國到る處愛讀を辱ふするの盛運に到れり、猶ほ此好少年雜誌を見ざる少年諸君の爲に左に掲載の一斑を擧げん、

社說には嚴正の筆を以て專ら少年敎育に關する事を論議し、以て少年界の嚮導たらんとを期し、**學說**には理科學術上の新說奇話を報じ、**文藝**には清新美妙の文學詩歌等を掲ぐ、**小說**には趣味限なき少年小說を載せ、以て優美の思想を養はしめんし、**叢談**には大人豪傑の傳記古今內外の逸話を蒐め、立志發憤の志を勵す、**英學**には平易の英文反譯の模範等を收めて、英學者の爲にする所あり、**雜纂**には奇抜の筆を以て少年界の新聞を報導し、且つ之を論評し、以て新聞を讀まざるも可ならしむ、**通信**には各地少年諸君の信書を掲ぐ、以て全國少年界の動靜と各地の風俗形勢を知るを得べく、**寄稿**に富みたるとは少年文庫獨得の長所として誇るところにして、每號少年諸君の寄送に係る文章數十編詩歌百餘首を收めざるこ となし、

東京府下北豐島郡上駒込村十九番地 **少年園**

哲學雜誌

●第六十八號十月五日出版
●本誌定價一冊郵税
六冊前金郵税共五十

◎論說●師範學校について（承前）文學士日高眞實●形
理學ノ三段論法內明ノ三支作法並彌兒ノ歸約則ヲ論ズ
文學士大西祝●自由意志論ト必至論（承前）ドクトル、オ
イロンフィー中嶋力造◎史傳●「ソクラテス」前の希臘
（第四回）文學士大西祝◎批評●「敎育の大本」ヲ評ス
◎解題●釋迦牟尼佛一代記參考書目村上專精◎雜錄●
於る平等主義の代表者「ウオルト、ホイトマン」Walt Wh
の詩に就いて●希臘人の彫像（承前）◎雜報●哲學懸賞問題●
獨逸國語大學に於る實驗的心理學攻究の近況●米國コーネル
大學哲學院略況●外國語を讀むの遲速●「マインド」雜誌編輯
人「クルーム、ロバートソン」氏●新任文科大學史學科講師箕
作元八氏●新任文科大學英文學科敎師「オーガスタス、ウー
ド」氏●學會〇新著

發行所 東京本鄉六丁目五番地 **哲學雜誌社**

●●廣告●●

近來諸敎會、又は信徒、所々に徘徊致し**孤女學院**の製**封筒**と稱して**押賣**を致す者有之候へ共、孤女學院に於ては更に、右樣の者差出し不申候間、此段御**注意**迄に廣告致置候也

明治廿五年十月

女學雜誌社內 **孤兒の友**

孤女學院の製**封筒、卷紙、木綿縫糸**等は京橋區築地新榮町立敎女學校內**伴君保**氏にて便宜の爲取次致候也

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

第四版

百人一首講義

正價金廿八錢
郵税四錢

文部大臣子爵榎本武揚公題字
大學院醫學士三島通良先生編述

皇后宮御覽

增補訂正第三版

はゝのつとめ

親の巻　妊婦産婦の心得定價金三十錢(郵税二錢)

子の巻　育兒法定價金四十錢(郵税四錢)

右は我國無双完全無比なりとの好評を博したる日本子母衞生書なり、華族女學校醫科大家産科婦人小兒科病室並に群馬縣高等小學其他の諸學校に於て參考書として用ゐらる、文章は談話體總平假名付にして極めて理解し易し。婦人方への贈物として最上の好品なり

東京下六番町

女學雜誌社

轉居

麹町區下六番町六番地明治女學校内

右在寓土曜日午后ヨリ水曜日午后迄

迎接日　毎火曜日午后三時ヨリ

退養

水曜日夜ヨリ土曜日午前迄ハ王子ニ退養シ事務上ノ來訪ヲ謝絶シ且ツ書信ヲ受ズ命用ノ人ハ下六番町ノ方へ土日月火水五日ノ内ニ御申越ヲ請フ

巖本善治

是迄女學雜誌並に書籍代金弊社巖本善治宛にて御遞送に相成候向きも有之候、右にては帳簿登記上其他に於て不便に御坐候に付爲換御取組何卒以後直に女學雜誌社宛にて爲替御取組御郵送被成下度候

女學雜誌社發送部

一書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增の事

一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は届け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

冊數	前金	府外
十冊	五十八錢	六拾三錢
廿六冊(半年)	同 一圓四十三錢	同 一圓五十六錢
五十二冊(一年)	同 二圓六十錢	同 二圓八十六錢

○白赤の内一方講讀の分

冊數	前金	府外
六冊	三拾五錢	三十八錢
十三冊(半年)	同 七拾三錢	同 七十八錢
廿六冊(一年)	同 一圓三十錢	同 一圓四十三錢

一冊 金六錢　郵税 金五厘

廣告料及無料廣告

一行	一回	(廿七字詰)	前金 拾錢
同	三回以上		一割引
同	六回以上		二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增さ定む。

東京市麹町區下六番町六番地

發行所　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三